

# シノドス国際社会動向研究所報告書

## 「新しい中間層の可視化に向けて（２）」

2020年5月13日

文責・橋本努／金澤悠介／吉田徹

本報告書は、シノドス国際社会動向研究所が2019年に行った第三回社会調査に関する分析である。

2017年に行った第一回目の調査とその分析については、すでに同研究所のホームページに、報告書「新しい中間層の可視化に向けて」として掲載した（2018年4月）。また、2018年の調査とその分析結果については、これを英文論文<sup>1</sup>として刊行した（2019年11月）。本報告は、第三回目の調査の報告であるとはいえ、日本語の報告書としては二回目となるため、タイトルは「新しい中間層の可視化に向けて（２）」とした。

---

<sup>1</sup> Tsutomu Hashimoto, Yusuke Kanazawa, Kyoko Tominaga, “A new liberal class in Japan: based on latent class analysis,” *Economic and Social Changes: Facts, Trends, Forecast*, 2019, vol. 12, no. 5, pp. 192–210. DOI: 10.15838/esc.2019.5.65.13

## エグゼクティブ・サマリー（要旨）

■前回の分析と同様、今回の調査においても「新しいリベラル」の実態を探り当てるために、理論的準拠を持つ①投資志向（人的資本形成への志向）、②普遍主義（フェアネスへの志向）という2つの基本的特徴に加え、③反偏見（基本的な人権の是認）、④対等化（健全な権威の是認）、⑤脱文脈（組織からの自由）、⑥批判的態度（従属的態度との距離）という6つの意識が社会でのどのように分布しているのかを分析するとともに、「天皇制」や「日米安保」についての質問項目を加えることで、より詳細な意識分布とクラスターの把握に努めた。

■具体的には、コロナウイルスの蔓延をも念頭に置きながら、日本の現状を説明する「コンフォーミズム」の核心ともなっている、人々の政治・社会的意識を潜在クラス分析によって調査した。1,200名のサンプルからは、「新しいリベラル層」（24%）、「ライト保守層」（25%）、「コア保守層」（10%）、「判断保留層」（30%）、「黙従傾向層」（11%）が存在することがわかった。狭い意味で「旧リベラル」と呼ぶことのできる人は、一人しかいなかった。

■将来世代への「投資志向」によって特徴付けられ、「創造階級」とも適合する「新しいリベラル」は、政治的志向は異なるものの、人的投資志向（孫世代への投資）と普遍主義的（他者を差別しない）態度において「ライト保守層」とも共通している点が見いだせる。ともに「健全な権威」を認める方向では共通しており、「ライト保守層」も潜在的なリベラルとして期待することができる。反対に、「新しいリベラル」と広義の「旧リベラル」の層は、人物クラスター（人物特徴）では共通する部分が多いものの、平和主義や天皇制などに対する態度は異なっている。

■本分析が抽出を目指す「新しいリベラル層」は、女性や高学歴層、社会的階層では下降移動しているとの認識を持っており、無党派層であることが多い。また、この層は全体の3割弱を構成しており、「ライト保守」と統合すると、ほぼ過半数を占めている。「新しいリベラル層」と「ライト保守層」の支持政党や食嗜好などは異なっているものの、教育の社会化や少子化対策への公的介入について否定的な点などにおいても共通している。

■以上からは、主観的なイデオロギー・政治意識においては食い違いがあるものの、「新しいリベラル」と「ライト保守層」を新しい中間層の担い手として認識できることが特定された。

## 目次

1. はじめに
2. 新しい問題状況
3. 理論の枠組み（踏襲する理論の要約と追加）
  - 3-1. 理論的枠組みの要約
  - 3-2. 新たに加えた理論的枠組み
4. 2019年の調査分析
  - 4-1. 各層の特徴
  - 4-2. 各層の社会的背景の分析
  - 4-3. 「新しいリベラル層」と「旧リベラル層」の比較
  - 4-4. 政治志向性と政治的態度
  - 4-5. 他の特徴の分析
  - 4-6. 人物クラスターとの関係
  - 4-7. まとめ：新しいリベラル層とライト保守層の比較
  - 4-8. 食嗜好の分析
5. 補説（4クラスモデルの分析）
  - 5-1. 4クラスモデルにおける各層の諸特徴
  - 5-2. 4クラスモデルにおける各層の社会的背景の分析
  - 5-3. 4クラスモデルにおける政治志向性と政治的態度
  - 5-4. 新しいリベラルを析出するための他の質問群に対する回答傾向
  - 5-5. 人物クラスターとの関係
  - 5-6. 4クラスモデルの「新しいリベラル層」の特徴：まとめ
  - 5-7. 4クラスモデルにおける食嗜好の分析

## 1. はじめに

皆さまの寄付によって設立されたシノドス国際社会動向研究所は、2020年4月3日に、三周年を迎えることができました。これまで私たちは、毎年一回、ウェブを通じた社会調査を実施し、また2018年から2019年にかけては、三菱財団の助成金を得て、「新しいリベラル」の研究を深めてきた。ここに報告するのは、第三回の社会調査の分析結果である。

本プロジェクトにおいては、第二回目の調査分析から、計量社会学が専門の金澤悠介（立命館大学）が加わり、新たに「潜在クラス分析」という統計分析手法を用いることで、分析のレベルアップを図っている。それ以前の分析では、私たちは「新しいリベラル」というものを理論的に想定したうえで、その価値理念に適合する人たちを探すという方法を使った。これに対して今回の分析では、いわば「下から」の目線で、「新しいリベラル」の担い手たちの特徴を探っている。さまざまな質問を用意して、回答傾向の似ている人たちを一つのまとまりのある階層（「クラス」）として析出し、そのなかの一つの階層に、新しいリベラルの諸特徴を見出している。

私たちは潜在クラス分析によって、「新しいリベラル」と呼ぶことのできるクラスを見つけることができた。さらに面白い結果も出た。保守的な人たちの層が二つに分かれ、「コア保守層」と「ライト保守層」をそれぞれ取り出すことができた。そのなかでも「ライト保守層」は、新しいリベラルと呼んでいい特徴を備えていることが分かった。

「新しいリベラル層」と「ライト保守層」は、基本的なイデオロギー的傾向がよく似ている。例えばこの二つの層の人たちは、「投資志向」と「普遍主義」の点で、共通する傾向をもっている。あるいは「天皇制」「日米安保」「絶対平和」「憲法九条」についても、類似した考え方をもっている。ただし「新しいリベラル層」の人たちは「リベラル」を自認し、「ライト保守層」の人たちは「保守」を自認する、という違いがある。また、支持政党においては、「新しいリベラル層」の人たちは、他と比べて立憲民主党やれいわ新選組を支持する人の割合が高い一方で、「支持政党なし」の人が65%もいる。これに対して「ライト保守層」の人たちは、自民党や維新の党を支持する割合が高いという違いがある。けれども「ライト保守層」の人たちは、基本的なイデオロギー意識の点で、私たちが「新しいリベラル」と呼ぶものに合致していることが分かった。

これは私たちにとって、驚くべき結果であった。私たちは、「新しいリベラル層」の担い手たちの特徴を可視化しようとした。ところがその分析の副産物として、私たちは「ライト保守層」と呼ぶことのできる人たちの特徴も可視化することができた。これは今回の分析結果の大きな認識利得といえるだろう。

以下では、まず新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって生じた新しい問題状況を理解することからはじめ、その次に、私たちの分析の理論枠組みを紹介する。そしてメインとなる第四章では、2019年度の調査分析の結果を報告する。続く五章は補説であり、分析方法を変えた場合の分析結果を補足している。

## 2. 新しい問題状況

新型コロナウイルス感染症（急性呼吸器疾患 COVID-19）の流行で、この数か月のあい

だに世界の状況はガラリと変わってしまった。2019年12月に中国の湖北省武漢市で最初の症例が見つかり、同市内で感染が爆発的に広がり、これと並行して世界各地へと感染症が拡散した。世界保健機関（WHO）は、2020年1月31日に「緊急事態」を宣言、3月11日には、同機関のテドロス・アダノム事務局長がこれは「パンデミックに相当する」と表明する。4月2日には、確認された感染者が世界全体で100万人以上にのぼり、5万1千人以上が死亡した。おそらく日本でもどの国でも、最悪の事態はまだこれから先に訪れるにではないかと予想されている。米国では10~24万人が死亡するだろうとの予測も出た。（ただしトランプ大統領は4月11日、この予測を下方修正して、死者数はこれよりもかなり下回るだろうと述べた。）

国連事務総長のアントニオ・グテーレスは3月31日、この新型ウイルスが「第2次大戦以来の最大の試練」であると警告を発した。歴史上これに匹敵する感染症は、「スペインかぜ」と呼ばれる1918年のパンデミックであろう。約100年前に世界を襲ったこのパンデミックは、1918年1月から1920年12月までの約三年間に、世界人口の四分の一に相当する5億人を感染させたと言われる。そのときの死者数は、1,700万人から5,000万人のあいだと推定されている（あるいは一億人（世界人口の5%）という説もある）。

当時のスペインかぜの流行は、社会学者のマックス・ウェーバーや、画家のジグムント・クリムトやエゴン・シーレなどの命も奪った。人々は死の恐怖に怯え、どの国でも社会不安が広がった。そうした状況下で、ドイツではヒトラーの率いるナチス政権が誕生した。感染に対する人々の不安が、「大いなる国家」を求める声となり、全体主義の国家が生まれたのである。

現在の新型コロナウイルスの流行も、当時と似たような社会状況をもたらしているだろう。私たちは、死を恐れる漠たる不安から、強靱（レジリエント）な政府を求めるようになっている。人々の要請を受けて、各国の政府は感染症の拡大を防ぐための政策を次々と発動している。自粛の要請、都市の封鎖、罰金付きの外出禁止令、マスクの配給システム、感染経路の確認のためのプライバシーの蹂躪、等々。これらの政策はしかし、残念ながら、感染症の拡大を完全に防ぐには至っていない。感染症を防いで人命を守るためには、さらなる強権的な政策が必要であるのかもしれない。感染を完全に阻止しようと思ったら、強権主義の政策を受け入れざるを得ない。そのような状況のなかで、私たちはますます自由を奪われ、苦境に陥っている。

おそらく自由民主主義の体制は、感染症がもたらす危機に対して脆弱であるだろう。政府は自由と民主主義を重んじるかぎり、人々の行動を大きく規制することができない。感染症が爆発的に増大すれば、自由民主主義の国といえども、強権的な全体主義システムを採用せざるを得ないだろう。もちろん長期的には、感染を防ぐことに成功した強権国家よりも、「集団免疫化」に成功した自由民主主義の国（例えば現在のブラジルやスウェーデンなど）の方が、経済的パフォーマンスにおいてすぐれた成果を収める可能性はある。最終的な評価については、今後の世界の動向を見極める必要がある。

いずれにしても現在、自由民主主義の国々は、大きな試練に立たされている。学校の休校、外出の自粛、イベントの中止、リモートワークへの転換、倒産と失業者の増大、等々によって、私たちの社会は、あらゆる方面でブレーキをかけられている。私たちの社会は、全体主義の体制へと変容する危険を抱えている。

やがて新型コロナウイルスの流行が終息すれば、世界はまた元の状態に戻るだろうか。あるいは人々は、全体主義の現実を受け入れ、パフォーマンスのよい全体主義政府を支持するようになるだろうか。未来のことは分からない。しかし現時点で、私たちは次のように問うてみたい。私たちが築き上げてきた自由と民主主義のシステムが制約されるなかで、自由民主主義の最後の牙城となる理念や制度とは、いったい何だろうか。

日本はこれまで、都市封鎖や外出禁止令などの強権的な手段に訴えずに、なんとか医療面でのオーバーシュートを免れてきた。他国に比して、新型コロナウイルスによる死者数の人口比は、相対的に少なく推移してきた。欧米諸国で新型コロナウイルスの感染症が爆発的に広がるなかで、日本は比較的善処してきた。むしろ今は、楽観することができない。感染者数のトラジェクトリー解析のグラフをみると、日本も感染の拡大において例外ではないことが分かる<sup>2</sup>。日本にも本格的なパンデミックが訪れる可能性がある。しかしそうはいっても、日本はなぜこれまで、感染の拡大を抑制することができたのか。

一つの視点は、新型コロナウイルスには三つのタイプがあり、日本と中国と欧米でそれぞれ異なる種類のウイルスが感染拡大しているという仮説である。他方で思想や価値観の観点から解釈すると、日本人あるいは他の東アジア諸国の国民は、「コンフォーミズム」の価値観や態度をもっている点が、今回のパンデミックに対処する際の強みとなっているという点を挙げることができる。

コンフォーミズムとは「同質主義」や「同調主義」や「画一主義」などと訳される価値観（行動習慣）である。これに対比される理念は、多様性を重視するプルーラリズム（多元主義）である。日本人は例えば、昭和天皇の崩御に際して、さまざまなイベントを自粛するという、同調性をもっている。誰に強制されるのでもなく、自粛するという同調行動は、リベラルな多元主義の観点からすれば、拒否すべき態度であるかもしれない。しかしコンフォーミズムは、今回の新型コロナウイルス感染症への対応に際しては、感染拡大を阻止するために役立ってきた。政府が外出禁止令を出さなくても、各人が外出を自粛するという同調行動が、感染の拡大を防いできた。少なくとも北海道では、そのような行動が、2020年の2月から3月にかけて、感染の拡大を阻止するために機能したといえる。

同調的な行為を促すコンフォーミズムは、一見すると自由に反する価値観である。それは人々の多様な考え方に不寛容であり、逸脱的で個性的な態度を抑圧する作用をもっている。けれども視角を変えて、強権的な全体主義の観点からみれば、コンフォーミズムは自由社会の牙城となる。コンフォーミズムは、強権的な権力の発動を阻止するための価値観ないし態度となる。人々が自粛することで、感染症の拡大を防ぐことができるならば、政府はそれ以上の強権的手段を行使する必要がないであろう。

新型コロナウイルスの感染拡大を阻止するために、私たちは、強権主義の政治を受け入れるのか、それともコンフォーミズムによって対処し、強権の発動を防ぐのか。これは究極の選択問題であるが、おそらく自由民主主義のシステムは、後者とともにあるのではないか。

コンフォーミズムよりも、もっとすぐれた対応の仕方があると言われるかもしれない。

---

<sup>2</sup> <https://web.sapmed.ac.jp/canmol/coronavirus/trajectory.html>  
(2020年4月16日閲覧)

例えばオーストラリアでは、3月下旬に感染者のピークを迎えたものの、都市のロックダウンによって、感染者数の増加を激減させることに成功している。あるいは韓国では、感染者のスマホのGPSデータ（移動ルート）を公開することによって、感染者数の増加を抑えることに成功している。加えてオーストラリアも韓国も、PCRの検査数を増やし、感染者を可能なかぎり可視化することで、感染拡大を抑制してきた。（4月18日の時点で、100万人当たりの検査数を計算すると、オーストラリアで16,005人、韓国で10,772人、日本で880人となる<sup>3</sup>。）オーストラリアも韓国も、感染の拡大抑制において成功しているが、しかしその成功は、いずれも自由を犠牲にして得られた成果である。オーストラリアでは外出の禁止、韓国では私的な移動に関わるGPSデータの公開という犠牲を払って、感染症を抑制してきた。日本もまた、こうした施策を施さなければ、感染の拡大を防ぐことができないかもしれない。その場合には日本においても、自由民主主義は挫折を余儀なくされるであろう。

むろんPCR検査の拡充は、自由民主主義の体制を抑圧するものではない。日本政府がなぜいままでこの検査を拡充してこなかったのかについては、これまでの専門家の判断を含めて、今後検証されなければならない課題の一つである。PCR検査による感染者数の把握は、私たちが自らの行動を反省的に捉えかえすための手段であり、新しいリベラルの観点からも、まずもって必要な政策である。

まとめると、自由民主主義の社会が、新型コロナウイルスの問題に善処するためには、都市をロックダウンせず、しかも各人のプライバシーにかかわるGPSデータの公開を求めずに、PCR検査の拡充と自粛要請の徹底によって、感染の拡大を抑える必要がある。それは結果として失敗するかもしれないが、しかしいま問われているのはまさに、強権主義を抑制するための私たちの思考習慣(habit)であり、実際の行動であるだろう。

シノドス国際社会動向研究所では、前回の報告書（「新しい中間層の可視化に向けて」2018年）において、コンフォーミズムの問題を理論的に取り入れた「新しいリベラル」の理念を理論的に描いた。しかし前回の報告書では、このコンフォーミズムの問題が当時（三年前）の社会で大きな問題になっていなかったため、掘り下げた分析をしなかった。コンフォーミズムの価値観は、「新しいリベラル」の担い手たちの意識に、どの程度関連するのか。この問題を調べることは、私たちの今後の課題であるだろう。

その一方で、シノドス国際社会動向研究所では、「新しいリベラル」が「健全な権威を受け入れる立場」とあるという想定の下に、たんに多様性や反権威（批判）を強調するリベラルとは異なると考えた。私たちは、そのような「新しいリベラル」の意識を可視化しようと試みた。「健全な権威」を受け入れるリベラルとは、どのような人たちなのか。今回の報告書では、前回よりもさらに分析技術のレベルを上げて、より立ち入った分析を行っている。その副産物として、興味深い事実を発見してもいる。

もとより本報告書は、2019年の社会調査に基づく分析であり、新型コロナウイルスの問題を直接扱うものではない。けれどもその分析手法と分析の結果は、今後の日本社会のあり方を考えるうえで、大きな示唆を与えると信じている。新しいリベラルは、健全な権威を受け入れる立場である。この新しい人々の特徴を、本報告書では可視化している。以下

---

<sup>3</sup> <https://ourworldindata.org/grapher/covid-19-tests-cases-scatter-with-comparisons>

では、まず私たちの理論について簡単に紹介し、今回の分析で追加した理論部分についてやや詳しく説明したい。そしてその次に、分析の結果を示したい。

### 3. 理論の枠組み（踏襲する理論の要約と追加）

前回の報告書では、「新しいリベラル層」を可視化するために、私たちがオリジナルに打ち立てた理論の枠組みを詳しく説明した。本報告書では、まずその内容を要約して紹介し、次に、今回新たに設定した理論の枠組みについて、説明を加えたい。

#### 3-1. 理論的枠組みの要約

私たちが最初に注目したのは、先進諸国にみられる「リベラルな中間層の不安定化」であった。従来、先進諸国においては、進歩的な中間層の人々が、一定の割合で存在すると考えられてきた。ところがこの進歩的な中間層が、いま、みずからの政治的な回路を見出せずに、流動化しているのではないか。そのような疑問から出発した。

リベラル派はこれまで、いつの時代にも、あらたに勃興する階級とともにあった。ブルジョアジー、労働者、第三次産業へ従事する人たち、IT産業に従事する人たち（創造階級）、社会進出する女性たち、等々。リベラルは、時代の要求とともに、社会を革新するための思想的なビジョンをその都度練り上げてきた。最近ではしかし、保守主義が台頭している。保守的な人たちが、社会の権力を握っている。あるいは、これまでリベラルであった人たちが、保守化しているのかもしれない。ここで「保守主義」や「保守化」と呼ばれる現象は、慎重に検討しなければならない。視点を変えれば、保守と呼ばれている現象は、実はリベラルの自己変容にすぎないかもしれないからである。

そこで私たちがまず注目したのは、「いわゆるリベラルと呼ばれている人たち」のイメージと、「新しいリベラルな人たち」のあいだの違いである。「いわゆるリベラル」とは、ここで「旧リベラル」と言い換えることもできるだろう。その特徴を思想的に表現すれば、リベラリズムの二つの特徴、すなわち「啓蒙」と「寛容」の思想を中心に据えて、「権威主義批判」「伝統主義批判」「画一主義批判」の三つの態度を、積極的に支持してきた人たちである。この三つの態度（批判）は、これまでリベラルな人たちの特徴であるとみなされてきた。これに対して一定の「権威」を認め、一定の「伝統」を認め、一定の「画一主義」を認める立場は、保守主義や愛国主義（ナショナリズム）や大衆政治（ポピュリズム）と呼ばれてきた。

しかし私たちは、「新しいリベラル」の立場を、「いわゆるリベラル」と同じ特徴を持つ人たちとは捉えない。新しく台頭しつつリベラルは、「保守」や「ナショナリズム」や「画一主義」と真っ向から対立するわけではない、と考えられるからである。

新しいリベラルは、新しい中間層の人たちの特徴である、とひとまず推測することができる。私たちは仮説として、新しい中間層の人たちが、第一に、1990年代の半ばからIT産業の勃興とともに台頭してきた「創造階級」の諸特徴であり、第二に、1990年以降になって大胆な新自由主義政策を取り入れた北欧福祉国家が、新自由主義と両立する形で示した「新しい福祉主義（Neo-welfarism）」の諸理念を支持する人たちであると想定した。そしてこの「創造階級」と「新しい福祉主義」に共通する諸特徴を、二つの基本的特徴と四つ

の派生的な特徴として捉えた。すなわち、(1)投資志向、(2)普遍主義、(3)反偏見、(4)対等化、(5)脱文脈、(6)批判的態度、という特徴をもった人たちであると想定した。

他方で私たちは、「新しいリベラル層」の人たちが、世帯所得や主観的階層所属意識、あるいは性別や年齢や職業などによっては、明確には規定されないだろうと想定した。言い換えれば、新しいリベラル層の人たちは、属性においてあまり共通点がなく、社会に分散して存在している、その意味で見えにくい、と想定した。

さらに私たちは、以上の(1)から(6)に関する質問に加えて、「健全な権威」をめぐる具体的な政策的論点、すなわち「天皇制」「憲法九条」「日米安保」「従軍慰安婦問題」についての質問を用意した。

これらの多様な質問に対する回答の傾向を、潜在クラス分析によって析出した。さまざまな質問項目に照らして、回答傾向が似ている人たちを一つのクラス（かたまり）として捉えると、どのような特徴をもったクラスが可視化されるのか。これが私たちの分析の基本アプローチである。

析出された潜在クラス（複数ある）の特徴を調べてみると、いろいろなことが見えてきた。その分析結果については、次節以下で検討したい。

私たちは理論において、さらにこれらの潜在クラスに属する人々が、はたして何らかの属性と関連するのだろうか、またどのような人物像（例えば「創造階級」や「草食系男子」などの18種類の人物像）と関連するのか、という問題を立てて、分析を進めていった。その分析結果については、次節以下で紹介する。

### 3-2. 新たに加えた理論的枠組み

今回の第三回目の社会調査において、新たに加えた理論的枠組みがある。

第一回目の社会調査の時点で、私たちは新しいリベラルの人たちが「投資志向」をもつと想定した。その場合の投資とは、自分や自分の子どもたちに対する投資だけでなく、私たちの孫世代に対する投資を含むと考えた。その投資志向には、おそらく、政府の少子化対策に対する態度や、女性の社会進出に対する態度も含まれるであろう。投資の目標には、社会全体の繁栄と、男女の対等化（女性の活躍）が含まれるであろう。

ギデンズが90年代の後半に「第三の道」(1998)のビジョンを提起して以来、「社会的投資国家」の理想はさまざまな拡張されてきたが、私たちのオリジナルな論点は、「社会的投資国家」は、孫世代にまで拡張された長期的視野を持たなければならない、というものである。新しいリベラル層の意識を、このように時間軸において拡張して捉えてみると、投資に関するどのような意識の違いが生まれてくるのか。私たちはこのように問題を立てた。

「未来への投資」「社会への投資」など、投資を理念とする福祉国家の追求は、ヨーロッパ諸国などの先進諸国では現在、「保守」と「リベラル」の両方の陣営から推進されている。その際、保守は「個人選択の自由」や「経済的投資効率」を重視するのに対して、リベラルは「社会的関係資本の強化」や、「経済に回収されない社会的なウェルフェアの上昇」を重視する、という対立がある。だがこの対立の構図は、自明なものではない。保守もまた「国を憂（うれ）う」という関心から、社会全体のパフォーマンスを検討するからである。保守主義とは、国を憂う「憂国の思想」である。憂国の感情から、社会道徳と社会貢献を引き出す思想である。これに対してリベラルは、投資をめぐる、いかなる思想理念もち

うるのか。じつはこの点が、現代のリベラル、あるいはリベラリズムの思想に欠けているように思われる。

「社会的投資国家」を継承するリベラルは今後、どのような方向へと向かうべきなのか。私たちは広い視野に立って、「新しいリベラル」の政策ビジョンを練り上げていく必要がある。

おそらく、国を憂う保守に欠けているのは、憂うべき国のかたちを、既存の道徳や価値観に訴える仕方ではしか想像することができない、という点にあるように思われる。本気で国を憂うのであれば、新しい社会的想像力、新しい社会的企て、新しい社会政策が必要ではないか。そこで私たちは、次のように問いかける。はたして私たちは、50年先の日本国民に、何を託すことができるのだろうか、と。社会的投資国家は、未来の社会のために投資する。しかしこれまでリベラルの側も、50年先を見据えた投資戦略については、明確な政策ビジョンのかたちに結実してこなかった。30年先の未来でさえ、これまでの社会的投資国家は、たくましく想像してこなかったように見える。

私たちのシノドス国際社会動向研究所は、「未来資本を築く社会」という観点から、孫世代になにかを「託す」という、世代間の「トラスト（信頼・信託）」を検討したい。孫世代の人々は、私たちにとっての共同の子孫であり、共通の富であり、共通の資産であるとみなすことができる。孫世代は、私たちの思いを継承する人たちである。そのような孫世代を共同で育成するために必要な政策とは何か。私たちは社会的投資国家の理念を、孫世代にまで拡張して構想したい。

このような関心から、私たちは今回の社会調査において、少子化対策をめぐって、次の二つの質問を基礎理論部分に追加した（Q17EおよびQ17F）。

Q17. 次の文章を読んで、あなたの考え方にあてはまるものをお選びください。（それぞれひとつずつ）

Q17E. 「〇〇さんは50代になりましたが、まだ孫がいるわけではありません。あるときニュースを見て、50年後の日本は人口がいまよりも約30%減って、9000万人を下回るという予測を耳にしました。日本社会の将来について考えると、何か自分にできることをしたいと思います。しかし他方で、対応策については政府に任せればいいとも思います。」あなたがもし〇〇さんだったら、どちらを選びますか。

1. どちらかといえば、自分の経験と能力を生かして貢献できることをしたい
2. どちらかといえば、政府の対応に任せたい

Q17F. 「〇〇さんは、あるときニュースで、最近の若者たち（18～39歳）の「結婚願望」は減っていない一方、若者たちにおいては「婚約者や恋人がいる人」の割合が低下している、という話を耳にしました。もしかすると最近の若者たちの一部は、異性とのコミュニケーションに戸惑いを感じているのではないかと〇〇さんは、心配になりました。」もしあなたが〇〇さんだったら、どちらを選びますか。

1. 政府は、若者たちの出会いやコミュニケーションを支援すべきである
2. 出会いやコミュニケーションは、本人たちに任せるべきである

以上の二つの質問のうち、前者の「質問 Q17E」は、少子化対策において、自発的になにか貢献したいと思うかどうか、という人々の自発性を問うている。これに対して後者の「質問 Q17F」は、政府が温情的な仕方で人々の出会いを支援すべきかどうか、を問うている。

さらに私たちは、新しいリベラルの投資傾向がもつ具体的な特徴を調べるために、次のような質問群を追加した。

- ・自分に孫がいたら（いるので）、孫の育児・教育にできるだけ参加して、親の子育て負担を軽減してあげたい
- ・自分に子供がいるなら（いるので）、一家団欒(らん)で食事するよりも、「子ども食堂」を通じて、多くの隣人たちと食事する機会を大切にしたい
- ・政府には、中学校の女性教員の割合を、50%にまで引き上げてほしい（2016年時点で中学校の女性教員割合は42%）
- ・どちらかと言えば、50年後の孫世代の日本人の活躍には関心がない
- ・年金その他の受給資格をめぐって、「高齢者」の定義を「70歳以上」に引き上げることについては、賛成だ
- ・50年先の日本社会を考えると、少子化による人口減少が心配だ
- ・政府には、少子化対策をするよりも、少子化を前提としたうえで、各種の政策を立ててほしい

以上の質問群は、孫世代の日本人に対してどのようにかかわりたいか、に関するものである。孫世代に投資するという場合、いろいろな仕方がある。自分でできることをする、孫がいる家族のみならず孫世代全体を社会的に支える、女性教員の増員を「孫世代の女性への投資」とみなして支持する、70歳まで働くことで孫世代への投資を支える、等々。これらはすべて、孫世代に対する広い意味での「投資」である。私たちは人々の投資志向について、その中身を知りたいと考えた。新しいリベラルの人たちや、他の階層の人たちは、どのような投資志向をもっているのか。以上はそれを調べるための質問群である。

以上において私たちは、私たちの調査の基礎理論を要約して紹介し、また、追加の理論装置について説明してきた。大雑把に言うと、「従来のリベラル（旧リベラル）」は、投資志向をその基本特徴としないのに対して、「新しいリベラル」は、投資志向を一つの基本的な特徴とする。さらに私たちは、この投資志向を「孫世代への投資」にまで拡張したときに、投資の中身について、他のイデオロギー的な立場（とりわけ保守）と何が異なるのか、という具合に問題を立てた。以下ではこの理論的な枠組みに基づいて、潜在クラス分析の結果を報告したい。

#### 4. 2019年の調査分析

第三回目となる2019年の調査では、前回の2018年の調査の分析方法を踏襲して、類似の質問群を用いて潜在クラス分析を試みた。すなわち、(1)「新しいリベラル層」を析出するための質問群（【投資志向】Q17a, b、【普遍主義】Q17c, d、【少子化対策】Q17d, f）、(2)旧

リベラル層析出のための質問群（絶対平和主義、従軍慰安婦問題の謝罪（反転）、日米安全保障条約、象徴天皇制にかんする質問 Q19\_05～08）、(3)「リベラル-保守」の自認を問う質問（Q23、なお「左派-右派」の自認を問う質問（Q22）でも同様の結果が得られた。）である。前節で説明したように、(1)については、今回、質問を少し変更している。

以上の質問群に対する回答を、潜在クラス分析によって分析すると、人々の回答傾向をいくつかのクラスに分けることができる。その結果は表 1 をご覧いただきたい。

表 1 クラス数の決定

	L <sup>2</sup>	df	BIC	P値
1クラスモデル	6368.479	1181	22626.448	0.000
2クラスモデル	5202.295	1161	21602.065	0.000
3クラスモデル	5008.430	1141	21550.002	0.000
4クラスモデル	4805.844	1121	21489.217	0.000
5クラスモデル	4724.273	1101	21549.448	0.000
6クラスモデル	4651.216	1081	21618.193	0.000
7クラスモデル	4587.400	1061	21696.178	0.000
8クラスモデル	4535.784	1041	21786.364	0.000
9クラスモデル	4475.690	1021	21868.071	0.000
10クラスモデル	4432.893	1001	21967.075	0.000

表 1 の B I C の値を見ると、4 クラスモデルがもっとも値が小さく、B I C という基準からは 4 クラスモデルがデータにより適合しているといえる。一方で、5 クラスモデルに着目すると、B I C の値は 4 クラスモデルと大きく異なる反面、モデルの適合度の検定を行うと 4 クラスモデルに比べ、5 クラスモデルは有意にデータに適合している。データへの適合という観点からみると、4 クラスモデルと 5 クラスモデルでは一長一短があるため、本報告書では、どちらのモデル（分け方）がより望ましいかについてはそれぞれのクラスの特徴を比較した場合の分析の「含意」が、どの程度有意義なものとして得られるかを考慮して行った。4 クラスモデルと 5 クラスモデルの両方を分析した上で、どちらの分析が有意義であるのかについて検討した結果、私たちは 5 クラスモデルを用いて分析したほうが、「新しいリベラル」をうまく可視化できることに気づいた。そこで以下では、5 クラスモデルにおける潜在クラスの特徴を分析する。4 クラスモデルの分析については、本報告書の補説として収録したい。

5 クラスに分けた場合、4 クラスモデルで抽出されるクラス（「新リベラル層」、「保守層」、「判断保留層」、「黙従傾向層」）に加えて、「コア保守層」と呼べるようなクラスが抽出された。つまり、5 クラスモデルは、4 クラスモデルに比べて、保守層を二つに分けることになった。よりリベラルな志向（人的資本への投資志向、普遍主義）をもった保守志向層と、コアな保守志向層が、分化したといえる。以下では、この 5 クラスのそれぞれの特徴を検討してみよう。その前に、分析の技術的な方法について、ここでやや立ち入った説明をしたい。

5 クラスモデルで分析を試みた際に、多項ロジット潜在クラス回帰分析という方法をとると、うまく推定することができなかった。具体的には、社会経済的地位を独立変数とし

て投入したときに、独立変数を投入する前と同じ5クラスが抽出されないという、潜在クラス分析特有の問題が生じた。そこで次善策として、推定精度がやや粗くなるが、推定された5クラスに所属するかどうかを予測するための二項ロジスティック回帰分析を行った。その結果を、上に示した「4クラスモデル」の多項ロジット潜在クラス回帰分析の結果と比較したところ、この二項ロジスティック回帰分析の推定で、大きな問題がないことを示す結果が得られた。なぜなら、4クラスモデルと5クラスモデルにおいて共通する、「新しいリベラル層」、「判断保留層」、「黙従傾向層」については、それぞれ関連する社会経済的地位の属性が大きく変化していないからである。

そこで今回、5クラス解の分析においては、二項ロジット回帰分析の結果を検討することにした。この結果は、他の社会的属性の影響をコントロールして得られたものである。例えば、「女性が新しいリベラル層になりやすい」という結果については、男女の収入・職業・学歴の違いを考慮しても成立する。このように、属性がもたらす傾向はコントロールされている。

#### 4-1. 各層の特徴

潜在クラス分析を用いて、人々の社会意識（イデオロギー）を五つのクラスに分けた場合、それぞれのクラスに分類される人たちの特徴は、どのようなものであろうか。表2をご覧ください。ここで五つのクラスは、それぞれ、「新しいリベラル層」（24%）、「ライト保守層」（25%）、「コア保守層」（10%）、「判断保留層」（30%）、「黙従傾向層」（11%）と名づけることができる。

表2 5クラスモデルに基づく社会意識のクラス分け

	新リベラル層	ライト保守層	コア保守層	判断保留層	黙従傾向層	全体割合
クラスター構成割合	24%	25%	10%	30%	11%	
<b>【投資性】孫への資産の残し方</b>						
教育費として使う	56%	59%	25%	42%	50%	49%
土地や金融資産として残す	44%	41%	75%	58%	50%	51%
<b>【投資性】支出の使い方</b>						
自分や家族の習い事	60%	72%	49%	55%	71%	62%
娯楽	40%	28%	51%	45%	29%	38%
<b>【普遍主義】外国団体客への対応</b>						
外国人団体客の受け入れをいったん見合わせる	13%	6%	67%	31%	48%	26%
マナーを学んでもらって外国人団体客の受け入れを継続する	87%	94%	33%	69%	52%	74%
<b>【普遍主義】アルバイトの採用</b>						
日本人を優先する	1%	12%	58%	40%	63%	28%
日本人と外国人の区別をしない	99%	88%	42%	60%	37%	72%
<b>【少子化】少子化への対応方法</b>						
自分の経験と能力を生かして貢献できることをしたい	60%	66%	36%	64%	81%	63%
政府の対応に任せたい	40%	34%	64%	36%	20%	37%
<b>【少子化】若者たちの出会い支援</b>						
政府は、若者たちの出会いやコミュニケーションを支援すべき	19%	34%	23%	29%	40%	28%
出会いやコミュニケーションは、本人たちに任せるべき	81%	66%	77%	71%	60%	72%
<b>【旧リベラル】日本は絶対平和主義を貫くべき</b>						
そう思う	20%	12%	12%	3%	58%	16%
どちらともいえない	43%	19%	11%	95%	30%	48%
そう思わない	37%	69%	78%	2%	12%	36%
<b>【旧リベラル】従軍慰安婦問題は必要以上の謝罪は不要</b>						
そう思う	55%	79%	75%	14%	69%	52%
どちらともいえない	27%	8%	1%	82%	31%	37%
そう思わない	18%	13%	25%	4%	0%	11%
<b>【旧リベラル】日米安全保障条約は破棄すべき</b>						
そう思う	15%	11%	10%	1%	58%	14%
どちらともいえない	57%	24%	22%	93%	21%	52%
そう思わない	28%	65%	68%	6%	21%	34%
<b>【旧リベラル】象徴天皇制は廃止すべき</b>						
そう思う	20%	1%	8%	1%	44%	11%
どちらともいえない	45%	0%	5%	90%	33%	42%
そう思わない	36%	99%	86%	9%	23%	47%
<b>政治志向性</b>						
コアリベラル (0-2)	11%	4%	4%	1%	1%	4%
リベラル (3-4)	34%	12%	5%	5%	12%	14%
中立 (5)	19%	22%	16%	38%	22%	26%
保守 (6-7)	12%	29%	22%	20%	35%	22%
コア保守 (8-10)	0%	22%	34%	3%	19%	12%
わからない	23%	12%	19%	33%	12%	22%

全体割合に比べ、割合の高いものを太字  
N = 1200

第一のクラスは、「新しいリベラル層」と呼ぶことができる。「新しいリベラル層」の人たちは、人的資本に投資したいと思う傾向がある。ただしその場合の投資は、孫世代に対する教育投資に対してであり、自分ないし家族の習い事に対してではない、という結果になった。「新しいリベラル層」は、4クラスモデルの場合と同様に、他者を差別しないで普遍主義的な態度を重んじる傾向がある。少子化対策においては、4クラスモデルの場合と異なり、政府に任せる態度をとることが分かった。ただし、4クラスモデルの場合と同様に、政府が人々の出会いを支援することには反対で、出会いは基本的に、本人たちに任せるべきだと考える傾向にある。天皇制や平和主義の問題については、「日本は絶対平和主義を貫くべき」「日米安全保障条約は破棄すべき」「象徴天皇制は廃止すべき」という質問に対して、それぞれ「はい」と回答する人たちに関連があるが、しかしその場合でも、「新しいリベラル層」でこれらの問題に「はい」と答える人は、それほど多くない(それぞれ20%、

15%、20%)。むしろ「いいえ」と答える割合の方が多い。「新しいリベラル層」の人たちは、これらの考え方を支持しているとは必ずしもいえない、という結果が出た。新しいリベラル層は、この点で、旧リベラル層とは異なるタイプの人たちである。

なお、このクラスに属する人たちは、自己認識としては「リベラル」あるいは「コア・リベラル（一〇段階の回答で0～2の回答に当てはまる人）」である割合が高い。この傾向は、4クラスモデルの場合と同様であった。このことは、自己認識のレベルでは、「新しいリベラル層」と「旧リベラル層」を区別することが難しいことを示している。

5クラスモデルの第二のクラスは、「ライト保守層」と名づけることができる。この層の人たちは、「新しいリベラル層」と類似の特徴をもっているが、しかし政治的な自己認識としては、自分を「保守」であると捉える傾向にある。まず、「人的資本への投資」については、5クラスモデルの「新しいリベラル層」（以下、すべて5クラス解の場合と比較する）よりもさらに強い投資傾向がみられる。孫世代への教育投資に対して積極的なだけでなく、自分ないし家族の習い事に対する投資に対しても、積極的である。他者への差別をめぐる問題に対しては、「ライト保守層」は、「新しいリベラル層」と同様に、普遍主義的な、差別をしない態度を示している。少子化対策については、興味深いことに、「ライト保守層」は「新しいリベラル層」と反対の態度を示している。すなわち、「自分の経験と能力を生かして少子化対策に貢献したい」と思っている。またその場合、「政府は人々の出会いを支援すべきである」と考える。「ライト保守層」の人たちは、天皇制や憲法改正の問題については、保守的な回答を示している。すなわち、天皇制を支持し、憲法九条の改正を支持している。またこのクラスの人たちは、イデオロギーの自己認識においても「保守」であり、「コア保守」と認識している割合も高い。

この「ライト保守層」は、天皇制や憲法改正をめぐる既存のイデオロギーの対立図式では、「保守」といえる。しかし私たちの理論的な枠組みにおいては、「新しいリベラル」の特徴を示している。人的投資志向と普遍主義的な態度が見られるからである。ここではさしあたって「ライト保守層」と名づけたが、私たちの理論に即して言えば、このクラスに属する人々は新しいリベラルであるから、「潜在的リベラル」と名づけてもよいかもしれない。視角の違いによって、保守ともリベラルともいえる人たちである。しかしこのクラスの人たちは、保守とリベラルの中間的な、態度が中庸的な存在ではけっしてない。この人たちを「リベラル保守」とか「保守リベラル」と呼ぶと、かえって混乱を招くであろう。

5クラスモデルの第三のクラスは、「コア保守層」と呼ぶことができる。この層の人たちは、4クラスモデルで「保守志向層」に分類された人たちと、さまざまな点で類似している。「コア保守層」の人たちは、人的資本へ投資する傾向がみられず、孫世代には、教育費よりも土地や資産を残すことに関心がある。自分や家族の習い事にお金を使うよりも、娯楽にお金を使いたいと考えている。また、外国人への差別的な対応に賛成する点で、反普遍主義（特殊主義）の傾向がみられる。少子化対策については、基本的に政府に任せる一方で、政府は出会いを支援するべきではなく、出会いは本人に任せるべきだと発想する。天皇制や平和主義の問題については、天皇制を支持し、憲法改正を支持する。イデオロギーの自己認識においても「保守」であり、「コア保守」の割合も高い。

ただし、この「コア保守層」と「ライト保守層」と比較した場合、「コア保守層」の人たちの政治的態度は、決していっそう保守的であるというわけではない。象徴天皇制を支持

しない人も、ある程度の割合でいることが分かる。「コア保守層」の人たちは、ラディカルな保守主義を支持しているわけではなく、保守的な態度を示す人たちのなかでも、人的資本投資に関心がなく、反普遍主義的な人たちであるといえる。この点において「ライト保守」と明確な違いがある。

5クラスモデルの第四のクラスは、「判断保留層」と呼ぶことができる。このクラスに属する人たちは、4クラス解の「判断保留層」とほぼ同じ特徴を示している。すなわち、「リベラル-保守」の自己認識においては、この二つのイデオロギーに対して中立的か、あるいは「わからない」と答える人が多い。また、自らの蓄えを人的資本に投資しない傾向や、普遍主義的ではない態度をとる傾向にある。ただし少子化対策をめぐる見解については、4クラス解の場合と異なり、有意な特徴はみられなかった。

最後に、5クラスモデルの第五のクラスは、「黙従傾向層」と呼ぶことができる。4クラス解の「黙従傾向層」と同様に、各質問に対する回答の選択肢のなかで、右端の選択肢「そう思う」ばかりを選択するような人たちである。しかし4クラスモデルの場合と異なり、5クラス解の「黙従傾向層」は、娯楽よりも自分や家族の習いごとに投資する傾向がある。その一方で、他者に対する差別的な取り扱いに賛成する(普遍主義的ではない態度をとる)傾向を示した。少子化対策については、新しいリベラル層と同様に、「自分の経験と能力を生かして貢献」したいと答え、政府が人々の出会いを支援することには賛成である。「リベラル-保守」の自己認識に関する質問には、4クラス解の場合と同様に、「コア保守」や「保守」を自認する人たちの割合が高かった。これはしかし、回答者が適当に、回答の一番右側の選択肢を選んだ結果であるかもしれない。

以上、5クラス解によって析出される五つのクラスの人たちの基本的な特徴について、検討した。

#### 4-2. 各層の社会的背景の分析

では以上の五つのクラスは、どのような属性の人たち、あるいはどのような社会的背景をもった人たちが担っているのだろうか。二項ロジスティック回帰分析によって、それぞれの社会的背景や属性を調べてみると、次のような結果を得た(表3参照)。

「新しいリベラル層」は、4クラス解の場合と同様に、女性や、高学歴層(大卒・院卒)がその担い手になる傾向がある。その一方で、低所得(世帯収入400万以下)のものや、主観的には、自分の所属する社会的階層が、親よりも下に移動したと感じているものもその担い手になりやすい。言い換えれば、高学歴でありながら、生活が苦しい人たちが「新しいリベラル層」の担い手である可能性が高い。

「ライト保守層」は、60代、自営業者、高所得層の人がなりやすい。この人たちは、社会経済的な地位が高く、価値観はリベラルだけれども、イデオロギーに関する自己認識としては保守である。

「コア保守層」は、男性になりやすい。それ以外の属性や社会的背景は、関連がない。人は年齢とともに保守的になるという傾向は見られない。

「判断保留層」は、30~40代、中卒・高卒で、世帯所得については無回答、主観的には階層間を移動していない人がなりやすい。これは4クラス解の「判断保留層」と特徴がほぼ一致する。

「黙従傾向層」は、男性、高学歴層に比べ中卒・高卒、非正規雇用、高所得層の人がなりやすい。これは、4クラスモデルの「黙従傾向層」とほぼ一致する。このクラス人たちは、一見すると矛盾した人たちの集まりであるようにみえる。非正規雇用で高所得であるような人は、少ないようにみえる。おそらくこのクラスに属する人は、低学歴層と、高所得層（時間がなくて適当に回答する人たち）という、異質な層から形成されているのかもしれない。

表3 多項ロジット潜在クラス回帰分析による各クラスの担い手の解明（5クラスモデル）

	新リベラル層		ライト保守層		コア保守層		判断保留層		黙従傾向層	
	B	S.E	B	S.E	B	S.E	B	S.E	B	S.E
<b>男性ダミー</b>	-0.392 *	0.155	0.085	0.146	0.702 **	0.233	-0.178	0.141	0.373 †	0.214
<b>年代</b>										
20代	0.214	0.240	-0.226	0.227	-0.185	0.348	-0.137	0.233	0.525	0.328
30代	-0.138	0.240	-0.617 **	0.223	-0.063	0.325	0.500 *	0.208	0.439	0.314
40代	0.087	0.220	-0.462 *	0.204	-0.123	0.308	0.359 †	0.199	0.185	0.310
50代	0.184	0.228	-0.159	0.203	-0.444	0.355	0.163	0.212	0.084	0.322
60代					(reference)					
<b>学歴</b>					(reference)					
中学・高校					(reference)					
専門学校・高専・短大	0.313	0.229	-0.194	0.218	0.385	0.312	-0.055	0.199	-0.350	0.296
大学・大学院	0.444 *	0.199	0.138	0.179	-0.177	0.280	-0.152	0.170	-0.543 *	0.246
<b>職業</b>										
専門・管理	0.201	0.284	-0.308	0.246	0.278	0.409	0.229	0.253	-0.311	0.369
事務・販売	0.164	0.269	-0.437 †	0.239	0.108	0.396	0.332	0.239	-0.111	0.348
ブルーカラー	0.364	0.348	-0.521	0.323	0.236	0.482	0.221	0.310	-0.175	0.441
無職・学生	0.175	0.247	-0.259	0.218	0.321	0.363	0.047	0.226	-0.024	0.338
自営業					(reference)					
<b>非正規雇用ダミー</b>	-0.110	0.221	0.016	0.213	-0.064	0.334	-0.157	0.199	0.506 †	0.285
<b>世帯収入</b>					(reference)					
400万円未満					(reference)					
400～800万円未満	-0.429 *	0.189	0.479 **	0.179	-0.165	0.285	-0.199	0.177	0.402	0.271
800万円以上	-0.549 *	0.218	0.408 *	0.200	-0.304	0.327	-0.209	0.198	0.803 **	0.289
DK・NA	-0.169	0.213	-0.577 *	0.241	0.262	0.300	0.461 *	0.195	-0.097	0.342
<b>政令指定都市居住</b>	-0.007	0.151	-0.178	0.142	0.293	0.218	-0.053	0.138	0.254	0.202
<b>主観的社会移動</b>										
上昇移動	0.161	0.191	0.188	0.168	-0.147	0.275	-0.154	0.165	-0.191	0.247
非移動					(reference)					
下降移動	0.478 **	0.166	0.186	0.162	-0.096	0.247	-0.473 **	0.157	-0.145	0.235
Nagelkerke's R <sup>2</sup>	0.045		0.066		0.039		0.049		0.041	
N	1177									

属性についてさらに検討してみると、まず、「都市居住」は、5つのクラスのどれについても、統計的に有意な影響はなかった。アメリカのように、都市部に住んでいるからリベラルになるというような傾向は、見られなかった。また、全体的に、社会経済的地位の影響は小さいことが分かった。所得が低いからといって、特定のイデオロギー傾向に傾くわけではないことが分かった。第三に、若いからといって、必ずしも政治的なイデオロギー

の判断を留保する傾向があるわけではない。ただし「中卒・高卒」の場合、判断を留保する可能性が高いことが分かった。第四に、4クラスモデルの場合と同様に、5クラス解においても、年齢の影響が小さいということも分かった。

最後に、それぞれのクラスの人たちの階層帰属意識を質問したところ、「新しいリベラル層」の人たちは、他のクラスの人たちと比べて、自分を「下の上」「下の中」と位置づける傾向がある。(これは二項ロジット回帰分析の結果とも一貫的である。)  
「ライト保守層」の人たちは、他のクラスの人たちと比べて、自分を「中の上」と位置づける傾向がある。この人たちは、客観的にも主観的にも社会経済的地位が高いといえる。  
「コア保守層」の人たちは、他のクラスの人たちと比べて、自分を「下の下」と位置づける傾向がある。このコア保守層は、「下流の保守化」を担う存在であるといえるかもしれない。(しかし、客観的な社会経済的地位は、コア保守層と関連しているわけではない。この点については、さらに検討が必要である。)  
「判断保留層」の人たちは、他のクラスの人たちと比べて、自分を「中の中」と位置づける傾向がある。  
「黙従傾向層」の人たちは、他のクラスの人たちと比べて、自分を「上の下」と位置づける傾向がある。黙従傾向層には、低学歴・非正規雇用層も含まれているが、主観的な意識においては「上流の世帯」に所属しているという結果となった。

#### 4-3. 「新しいリベラル層」と「旧リベラル層」の比較

今回、2019年の調査で判明したのは、前回(2018年)の分析で「旧リベラル層」に分類された人たちが、実は「黙従傾向層」と呼ぶことができるような、あまり考えずに事態に応じる人たちであったということである。このクラスの人たちは、深く考えることを面倒であると感じる傾向にあるようだ。

しかしそれでも、「旧リベラル」と呼ぶことができるような人たちは、存在するはずである。イデオロギーの観点からみて、「旧リベラル層」と呼びうる人たちは、どのようにして析出することができるだろうか。旧リベラル層は、天皇制や日米同盟に反対し、絶対的な平和主義の立場をとるだろう。従軍慰安婦問題には日本政府が謝罪しつづけることを求めるだろう。この立場の人たちは、次の6項目の合計得点(5~30点)を計算して、上位10%(20点以上がこれに当てはまる)に入る人たちである、と想定することができる。(※1. そう思わない~5. そう思う、反転の場合は1を選ぶと5点とした。)

- A. 日本は「絶対平和主義」を貫き他国が攻めてきたら無血降伏、或は自衛隊以外で抵抗すべきだ。
- B. 従軍慰安婦問題について、日本政府は韓国が納得するまで陳謝する必要ない。(反転)
- C. 象徴天皇制は民主主義に反するものなので、廃止すべきである。
- D. 自然環境を守ることも、企業の利益や国家の繁栄を優先すべきだ。(反転)
- E. 政治においては、代案を出す人に対して、特別の敬意を払うべきだ。
- F. 政治家に必要な資質は、合意形成力よりもリーダーシップだ。(反転)

このような想定に合致する旧リベラル層の人たちは、5クラスモデルでは、「新しいリベラル層」の属する人が22%、「ライト保守層」に属する人が4%、「コア保守層」に属する人

が2%、「判断保留層」に属する人が7%、「黙従傾向層」に属する人が18%、となった。これはすなわち、「旧リベラル層」が「新しいリベラル層」とは必ずしも重ならないことを示している。

私たちの分析では、「新しいリベラル層」を析出するために、「投資志向」「普遍主義」「少子化対策」の三つに関する質問群を用意した（表4参照）。

表4 「旧リベラル層」の回答傾向

<b>【投資性】孫への資産の残し方</b>	
教育費として使う	55%
土地や金融資産として残す	45%
<b>【投資性】支出の使い方</b>	
自分や家族の習い事	62%
娯楽	38%
<b>【普遍主義】外国団体客への対応</b>	
外国人団体客の受け入れをいったん見合わせる	14%
マナーを学んでもらって外国人団体客の受け入れを継続する	86%
<b>【普遍主義】アルバイトの採用</b>	
日本人を優先する	23%
日本人と外国人の区別をしない	77%
<b>【少子化】少子化への対応方法</b>	
自分の経験と能力を生かして貢献できることをしたい	74%
政府の対応に任せたい	26%
<b>【少子化】若者たちの出会い支援</b>	
政府は、若者たちの出会いやコミュニケーションを支援すべき	26%
出会いやコミュニケーションは、本人たちに任せるべき	74%
<b>政治志向性</b>	
コアリベラル (0-2)	11%
リベラル (3-4)	29%
中立 (5)	17%
保守 (6-7)	18%
コア保守 (8-10)	9%
わからない	17%

これらの質問に照らして「旧リベラル層」の特徴を調べてみると、旧リベラル層の人たちは、新しいリベラル層と比較して、(1)人的資本へ投資する人の割合がほぼ同じで、(2)普遍主義を選択する人の割合がやや低く、(3)自分の経験と能力を活かして少子化対策に貢献したい（合わせて出会いは本人に任せるべきである）と考える人の割合がやや高い、ということが分かった。

また、「リベラル-保守」の軸で、自分のイデオロギーをどのように自認しているかについて、「新しいリベラル」と「旧リベラル」を比較したところ、「コア・リベラル」と「リベラル」の割合は、ほぼ同じであることが分かった。これはつまり、自分が「リベラル」として自認する人たちのなかに、「新しいリベラル」の人たちと「旧リベラル」の人たちが混ざっている、ということである。（この二つのカテゴリーの両方に属する人もいる。）

次に、「旧リベラル層」の社会的背景について調べてみると、この層に分類される人たち

は、女性や高学歴層（大卒・院卒）が担い手である可能性が高いことが分かった。（表5参照。）しかし旧リベラル層は、低所得であるわけではなく、また主観的な階層移動において下降しているわけでもない。主観的な階層移動に関するこの特徴は、「新しいリベラル層」において顕著であるが、これに対して旧リベラル層は、決して主観的に下方へ移動しているわけではないことが分かった。

表5 「旧リベラル層」の社会的背景（二項ロジスティック回帰分析）

	B	S.E.
<b>男性ダミー</b>	-0.443 *	0.218
<b>年代</b>		
20代	-0.251	0.366
30代	0.197	0.321
40代	0.380	0.297
50代	0.158	0.322
60代	(reference)	
<b>学歴</b>		
中学・高校	-0.542 †	0.280
高専・専門・短大	-0.496 †	0.275
大学・大学院	(reference)	
<b>職業</b>		
専門・管理	(reference)	
事務・販売	-0.200	0.335
ブルーカラー	0.327	0.447
自営業	0.100	0.389
無職・学生	0.221	0.337
<b>非正規雇用ダミー</b>	0.236	0.310
<b>世帯収入</b>		
400万円未満	0.339	0.296
400-800万円未満	-0.307	0.304
800万円以上	(reference)	
わからない	0.218	0.326
<b>政令指定都市居住</b>	-0.051	0.210
<b>主観的社会移動</b>		
上昇移動	-0.131	0.273
非移動	(reference)	
下降移動	0.184	0.228
N	1177	
Cox & Snell's R <sup>2</sup>	0.018	

ちなみに、先の六つの質問に対し「旧リベラル層」の想定と完全に合致する人々（A・C・Eに対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」、B・D・Fに対し「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答）を特定してみると、この層に属する人たちは、回答者1,200名のうち、1名しかいないことが判明した。「旧リベラル」と私たちが呼ぶイデオロギーの担い手は、全回答者のうち1人しかいないのだ。これはすなわち、政治を担う社会層としての「旧リベラル層」が、いまやほとんど死滅しているか、あるいはそもそも、

以前から担い手がほとんどいなかったのか、いずれかを意味するだろう。このように、イデオロギーの観点から「旧リベラル層」に分類される人は、本報告書が分析するデータにおいては、ほとんどいなかった。

#### 4-4. 政治志向性と政治的態度

5 クラスモデルのそれぞれのクラスの人たちは、どんな政党を支持しているだろうか。表6は各クラスの支持政党を示している。

表6 各クラスの支持政党（5クラスモデル）

	新リベラル層	ライト保守層	コア保守層	判断保留層	黙従傾向層
自民党	8%	<b>37%</b>	<b>36%</b>	16%	24%
公明党	0%	2%	0%	<b>3%</b>	3%
共産党	3%	2%	2%	3%	2%
日本維新の会	3%	<b>7%</b>	5%	4%	8%
国民民主党	1%	1%	0%	0%	2%
立憲民主党	<b>11%</b>	5%	2%	4%	5%
社会民主党	<b>2%</b>	1%	0%	0%	2%
れいわ新選組	<b>6%</b>	2%	1%	1%	2%
NHKから国民を守る党	0%	2%	4%	1%	3%
支持政党はない	<b>65%</b>	42%	50%	<b>69%</b>	49%

調整済み残差が+1.96以上のものは**太字**

「新しいリベラル層」の人たちは、他のクラスの人たちと比べて、立憲民主党やれいわ新選組を支持する人の割合が高い一方、「支持政党なし」の割合が高いことが分かった（65%）。これに対して、「ライト保守層」の人たちは、他と比べて、自民党や維新の党を支持する割合が高い。「コア保守層」の人たちは、他と比べて、自民党の支持率が高い。「判断保留層」の69%は、「支持政党なし」であった。「黙従傾向層」の人たちは、とくに関連する支持政党がなかった。

すでに述べたように。私たちの解釈では、「ライト保守層」の人たちは、実質的には新しいリベラルといえるイデオロギー意識の特徴を備えている。以上の結果から分かることは、自民党や維新の党を支持する人たちのなかにも、新しいリベラルと呼ぶことができる人たちがいる、ということである。

#### 4-5. 他の特徴の分析

私たちは、新しいリベラルが、たんに権威を批判するのではなく、健全な権威を認める立場であると想定した。前回の報告書でその理論を詳述したが、ごく簡単にまとめると、「健全な権威」とは、社会的劣位者がリーダーシップをとることの承認（劣位者の対等化の促進についての承認）であり、また権力の運営に対する批判的議論が活性化された状態であり、各メンバーが複数の組織に所属することによる脱会可能性の確保や過剰コミットメントの抑止であり、先入見による排除の制約化であり、自由と民主主義の実現を目標とする指導者の承認である。こうした観点から、私たちは次のような質問を用いて、各クラスの特徴を調べてみた（表7参照）。

「新しいリベラル層」と「ライト保守層」の人たちはともに、他のクラスに比べ、【批判

的態度】「組織の運営にメンバーがとくに不満を持っていなくても、メンバーにはもっと発言権を与えるべき」、【脱文脈】「所属している組織での人間関係にしばられないために、ほかにも複数の組織に所属していきたい」、【対等化】「多くの組織で、一定の割合でリーダーを女性にするべきだ」、【対等化】「家庭環境や暮らす地域によって、社会的に有利／不利の差が出るのがあってはならない」、【健全な忠誠】「自分の国や地域や組織のリーダーが、自由と平等を重んじる人なら、自分ではできるかぎり何か貢献したい」という質問に対し、肯定的な回答をしているものの割合が有意に高い。

他方で「コア保守層」と「判断保留層」の人たちは、これらの主張に対する肯定率は高くなかった。以上の結果は、「新しいリベラル層」も「ライト保守層」も、実質的には「新しいリベラル」の思想的特徴を共有している、ということである。これらの層の人たちは、権力に対する批判的態度をもっている。悪しき権力から逃れるための「複数所属」の大切さを知っている。また、女性のリーダーを求めており、男女が平等に活躍できる社会を願っている。さらに、家庭環境の違いによって人生のチャンスが異なってはならないという「出発点の平等」を重んじている。最後に、権力ならなんでも批判するのではなく、望ましい権力であればそこにコミットメントしたいと考えている。以上はすべて、思想的には「リベラル」と呼ぶことのできる態度である。

ただし、「新しいリベラル層」と「ライト保守層」のあいだには、一つだけ違いがあった。後者は「自分にまかされた仕事は、どんなに理不尽な要求であってもやり遂げるほうだ」と答えている。この点だけが異なる特徴であった。

これらに対して、「コア保守層」の人たちは、「たとえ日本語に問題がないとしても、外国人が自分の上司になってほしくない」という主張に肯定するものの割合が有意に高い。これは、コア保守層の人たちが、外国人に対して排他的であることを示しているだろう。

次に、本報告書の理論編（第三節）で説明したように、私たちは別の質問群を用意して、新しいリベラル層や他の層の人たちの、「投資志向」の中身について調べてみた。すると興味深いことに、投資志向が強い「新しいリベラル層」と「ライト保守層」は、それぞれ投資志向の中身が異なることが分かった（表8参照）。

「新しいリベラル層」は、他のクラスに比べ、【女性活躍投資】「政府には、中学校の女性教員の割合を、50%にまで引き上げてほしい（2016年時点で中学校の女性教員割合は42%）」、および、【孫世代への無関心】「どちらかと言えば、50年後の孫世代の日本人の活躍には関心がない」という主張に対する肯定率が有意に高いのに対し、「ライト保守層」は、【参加型投資】「自分に孫がいたら（いるので）、孫の育児・教育にできるだけ参加して、親の子育て負担を軽減してあげたい」、【高齢者勤労】「年金その他の受給資格をめぐって、「高齢者」の定義を「70歳以上」に引き上げることについては、賛成だ」、および、【少子化への関心】「50年先の日本社会を考えると、少子化による人口減少が心配だ」という三つの主張に対する肯定率が有意に高いことが分かった。

なお「新しいリベラル層」も「ライト保守層」も、【社会化投資】「自分に子供がいるなら（いるので）、一家団欒(らん)で食事するよりも、「子ども食堂」を通じて、多くの隣人たちと食事する機会を大切にしたい」とはあまり思わないようであり、さらに、【少子化対策の是非】「政府には、少子化対策をするよりも、少子化を前提としたうえで、各種の政策を立ててほしい」という質問に対しては、肯定的な回答が多かった。つまり、いずれの層の

人たちも、子育ての社会化については消極的であり、また政府の少子化対策には懐疑的である、ということが分かった。

表7 各クラスの権威に対する態度

		新リベラル層	ライト保守層	コア保守層	判断保留層	黙従傾向層
【批判的態度】	組織運営にメンバーが不満を持っていないでも、メンバーにはもっと発言権を与えるべき	51%	61%	38%	20%	52%
【脱文脈】	所属している組織での人間関係にしばられないため、複数の組織に所属していきたい	39%	41%	31%	14%	41%
【対等化】	多くの組織で、一定の割合でリーダーを女性にするべきだ	36%	32%	16%	15%	34%
【反偏見（反転）】	たとえ日本語に問題がないとしても、外国人が自分の上司になってほしくない	8%	11%	34%	7%	40%
【脱文脈（反転）】	自分に任された仕事は、どんなに理不尽な要求であってもやり遂げる方だ	25%	31%	28%	11%	41%
【対等化】	家庭環境や暮らす地域により、社会的に有利／不利の差が出てはならない	56%	61%	47%	20%	56%
【健全な忠誠】	自国や地域や組織のリーダーが、自由と平等を重んじる人なら、自分は何か貢献したい	47%	55%	39%	15%	50%

調整済み残差が+1.96以上のものは太字

表8 各クラスの投資志向

		新リベラル層	ライト保守層	コア保守層	判断保留層	黙従傾向層
【参加型投資】	【孫の育児・教育にできるだけ参加して、親の子育て負担を軽減してあげたい】	37%	52%	24%	15%	47%
【社会化投資】	【一家団欒で食事より、「子ども食堂」を通じ多くの隣人との食事機会を大切にしたい】	14%	10%	11%	6%	25%
【女性活躍投資】	【政府には、中学校の女性教員の割合を、50%にまで引き上げてほしい】	21%	17%	15%	8%	28%
【孫世代への無関心】	【どちらかといえば、50年後の孫世代の日本人の活躍には関心がない】	32%	16%	31%	9%	36%
【高齢者勤労】	【年金その他の受給資格をめぐる、「高齢者」定義を「70歳以上」に引上げることは賛成】	22%	30%	20%	9%	38%
【少子化への関心】	【50年先の日本社会を考えると、少子化による人口減少が心配だ】	55%	78%	55%	33%	58%
【少子化対策の是非】	【政府には、少子化対策をするより、少子化を前提のうえで各種政策を立ててほしい】	66%	63%	56%	28%	65%

調整済み残差が+1.96以上のものは太字

これらに対して、「コア保守層」は、他のクラスに比べ、【孫世代への無関心】「どちらかと言えば、50年後の孫世代の日本人の活躍には関心がない」という主張の肯定率のみが高かった。これはつまり、「新しいリベラル層」も「コア保守層」も、いずれも孫世代の日本人の活躍には関心があまりないことを示している。言い換えれば、孫世代に対する投資志向を、「孫世代の日本人の活躍に関心がある」という仕方で想像力を膨らませているのは、「ライト保守層」のみである。

以上が、5クラス解における他の特徴の分析結果である。

#### 4-6. 人物クラスターとの関係

私たちは初回の調査から、新しいリベラルの人たちの具体的な人物イメージを知るために、18の「人物クラスター」を用意して質問してきた。今回の調査で分かったことは、IT産業の勃興とともに登場した「新しい市民」と呼ぶことができるような人たちは、「新しいリベラル層」よりもむしろ、「ライト保守層」において顕著にみられる、ということであった。これは私たちの予測とは異なる結果となった（表9参照）。

「ライト保守層」は、以下の人物クラスターと関連が強いことが分かった（クロス集計分析による）。

- ・「創造階級」人生は趣味も仕事も、できればクリエイティブなことに従事していきたい。
- ・「低所得創造階級」たとえ給料が低くても、文化的に価値ある仕事につきたい。
- ・「会話好き（階層横断性）」サークルやイベントなどで、互いの地位を気にせずに人と会話するのが好きだ。
- ・「会話好き（飲み屋）」飲み屋で人と話をするのが好きだ。
- ・「文化系サークル出身」中学以降の教育機関で、文化系の部活やサークルで活動していたことがある。
- ・「ネット洞穴人間」ネットで「お気に入り登録」をしたり、「お気に入り」のリスト化をしたりするのが好きだ。
- ・「コト消費志向者」洋服や調度品などの身の回りのモノよりも、グルメや海外旅行にお金を使いたい。
- ・「ケアに向いている人」私は人にやさしく接することが苦手ではないので、医療・介護関係の仕事にも向いていると思う。

さらに、以下の人物クラスターは、「ライト保守層」と「新しいリベラル層」の両方において関連が強かった。

- ・「同質的親密圏志向者」趣味の合う人たちといっしょに時間を過ごすことが好きだ。
- ・「自然派」ゴージャスな生活よりも、シンプルで自然派の生活が好みだ。
- ・「お笑い風刺者」偉い人たちの権威を笑い飛ばしてくれるようなお笑い系芸人が好きだ。
- ・「啓蒙的消費者」広告には踊らされず、じっくり考えてからネット販売で商品を購入する方だ。

表9 各クラスの人物像

	新リベラル層	ライト保守層	コア保守層	判断保留層	黙従傾向層	旧リベラル層
人生は趣味も仕事も、できればクリエイティブなことに従事していきたい	33%	<b>41%</b>	34%	26%	37%	37%
たとえ給料が低くても、文化的に価値ある仕事につきたい	17%	<b>20%</b>	11%	8%	18%	30%
サークルやイベントなどで、互いの地位を気にせず人と会話するのが好きだ	23%	<b>30%</b>	18%	9%	23%	31%
飲み屋で人と話をするのが好きだ	18%	<b>23%</b>	17%	13%	21%	20%
中学以降の教育機関で、文化系の部活やサークルで活動していたことがある	24%	<b>30%</b>	14%	14%	27%	36%
ネットで「お気に入り登録」をしたり、「お気に入り」のリスト化をしたりするのが好きだ	23%	<b>24%</b>	24%	11%	24%	20%
ネットで「情報発信」をしたり「チャット」したりするのが好きだ	5%	6%	8%	3%	<b>12%</b>	5%
まだあまり売れていないアイドルやアーティストの活動を応援するのが好きだ	5%	5%	8%	3%	<b>14%</b>	9%
趣味の合う人たちといっしょに時間を過ごすことが好きだ	<b>37%</b>	<b>40%</b>	25%	19%	29%	42%
毎朝お弁当を作ってあげてもいいので、妻（あるいは将来の妻）には働いてほしい	7%	6%	4%	1%	<b>9%</b>	7%
ゴージャスな生活よりも、シンプルで自然派の生活が好みだ	<b>47%</b>	<b>43%</b>	34%	22%	39%	46%
洋服や調度品などの身の回りのモノよりも、グルメや海外旅行にお金を使いたい	21%	<b>30%</b>	17%	9%	19%	20%
偉い人たちの権威を笑い飛ばしてくれるようなお笑い系芸人が好きだ	<b>21%</b>	<b>20%</b>	7%	8%	21%	27%
私は人にやさしく接することが苦手ではないので、医療・介護関係の仕事にも向いていると思う	11%	<b>12%</b>	8%	3%	<b>14%</b>	12%
広告には踊らされず、じっくり考えてからネット販売で商品を購入する方だ	<b>48%</b>	<b>51%</b>	<b>50%</b>	19%	29%	41%
モノをできるだけ持たない生活をしたい	42%	40%	35%	31%	40%	42%
最低賃金など低い賃金で働き続け、将来に希望が持てない	<b>17%</b>	8%	12%	9%	16%	14%
私は大卒の専業主婦で、外食のランチにはだいたい1,000円以上使っている	3%	2%	4%	3%	3%	3%

調整済み残差が+1.96以上のものは**太字**

「コア保守層」の人たちは、人物クラスターにおいては、ほとんど関連がなかった。唯一、「広告には踊らされず、じっくり考えてからネット販売で商品を購入する方だ」という特徴と関連があった。「コア保守層」の担い手が、どのような人たちなのか、今一つ見えてこなかった。しかしコア保守層の人たちは、「政治を笑い飛ばすお笑い風刺者」があまり好きではなく、「文化系サークル」の出身ではない、ということは分かった。コア保守層の人たちは、これらの人物クラスターとマイナスの関連を示した。

「判断保留層」の人たちは、人物クラスターにおいては、なにも関連がなかった。これもまた、意外である。判断保留層の人たちは、人物クラスターの選択において、判断を保留したわけではない。二者択一の問題に答えている。しかしその回答傾向からは、何も有意な人物イメージが浮かび上がってこなかった。

最後に「黙従傾向層」の人たちは、今回のアンケートでは「すべて右側の選択肢を選択する」という適当な態度をとるにもかかわらず、「ネットで「情報発信」をしたり「チャット」したりするのが好き」であり、「まだあまり売れていないアイドルやアーティストの活動を応援するのが好き」であり、「毎朝お弁当を作ってあげてもいいので、妻（あるいは将来の妻）には働いてほしい」と思い、「私は人にやさしく接することが苦手ではないので、医療・介護関係の仕事にも向いていると思う」傾向にあることが分かった。これらの人物クラスターから浮かび上がる人物イメージは、オタク系であり、心のやさしい人であり、潜在的な能力をもった人たちを応援する感受性を持っている、というものである。

興味深い結果は、「旧リベラル層」の人たちの人物特性が、「新しいリベラル」の人たちとほとんど共通する、ということであった。これは私たちの予想に反する結果となった。とりわけ興味深い点は、「低所得創造階級」や「会話好き（階層横断性）や「文化系サークル出身者」は、旧リベラル層の人たちに顕著であるということである。当初、私たちはIT産業の勃興とともに、創造階級（低所得創造階級を含む）が新しいリベラルの担い手になるのではないかと推測した。ところが低所得創造階級の人々は、むしろ旧リベラル層の意識と関連することが分かった。

#### 4-7. まとめ：新しいリベラル層とライト保守層の比較

以上において、私たちは5クラスモデルに基づいて、2019年の調査結果の主な分析を示した。これらの分析結果から、5クラスモデルの「新しいリベラル層」と「ライト保守層」の特徴をまとめると、次のようになる。

「新しいリベラル層」と「ライト保守層」は、回答者のそれぞれ24%と25%の人たちであり、いずれも決して少数派ではない。

「新しいリベラル層」の人たちの回答傾向は、概ね、私たちが理論的に想定したものであった。すなわち、「人的資本への投資」を重視し（ただしその場合の投資は、孫世代に対する教育投資に対してであり、自分ないし家族の習い事に対してではない）、他者を差別しない「普遍主義」の傾向がある。少子化対策については、政府が人々の出会いを支援することには反対で、出会いは基本的に本人たちに任せるべきだと考える。

また「新しいリベラル層」は、他のクラスの人たちと比べると、天皇制には批判的で、平和主義の立場をとる人もそれなりにいるが、しかしそれでも、天皇制を認め、絶対平和主義に批判的な人たちのほうが多い。全体的にみれば、反天皇制と絶対平和主義を支持し

ているわけではない。天皇制を支持し、平和主義に対して批判的である。

「新しいリベラル層」と「ライト保守層」はこのように、異なる点があるとはいえ、私たちの理論枠組みにおいては、「投資志向」と「普遍主義」の点で共通する傾向がみられる。一方は「リベラル」を自認し、他方は「保守」を自認するが、しかし以上の価値観においては類似していることが分かった。「ライト保守層」は、私たちの理論枠組みからすれば、もう一つのリベラルであり、「潜在的リベラル」と呼ぶことができる。

属性に注目すると、「新しいリベラル層」は、女性が多く、高学歴（大卒・院卒）でありながら、生活が苦しい人たちである。これに対して「ライト保守層」は、60代の自営業者で、高所得層の人がなりやすい。

支持政党についてみると、「新しいリベラル層」の人たちは、他と比べて、立憲民主党やれいわ新選組を支持する人の割合が高いものの、支持政党なしが65%もいる。これに対して「ライト保守層」の人たちは、自民党や維新の党を支持する割合が高いことが分かった。このように、支持政党については大きな違いがある。

「新しいリベラル層」は、さまざまな点で、健全な権威を支持することが分かった。ただしこの支持傾向は、「ライト保守層」にも共有されている。これら二つの層の人たちは、思想の観点からすれば、いずれも「新しいリベラル」と呼ぶことがふさわしい。

ただしこれら二つの層の人たちは、投資傾向の中身をめぐって、異なることが分かった。「新しいリベラル層」は、女性の活躍に投資したいと思う傾向があるのに対して、「ライト保守層」は、孫世代の育児や教育に直接参加したいと思う傾向があることが分かった。

人物クラスターについてみると、私たちが理論的に想定した「新しいリベラル層」の多くの特徴は、「ライト保守層」にみられることが分かった。創造階級、低所得創造階級、会話好き（階層横断性）、会話好き（飲み屋）、文化系サークル出身、ネット洞穴人間、コト消費志向者、ケアに向いている人、以上の人物特徴は、「ライト保守層」においてのみ、有意な関連が見られた。これに対して、同質的親密圏志向者、自然派、お笑い風刺者、啓蒙的消費者という人物クラスターは、「新しいリベラル層」と「ライト保守層」の両方に関連することが分かった。これらの結果から、IT産業の勃興とともに台頭した階層は、「ライト保守層」であったと解釈することができる。

「新しいリベラル層」と「旧リベラル層」は、人物クラスターにおいては、ほとんど同じ特徴をもつことが分かった。私たちの仮説（新しいリベラル層の人たちは、旧リベラル層と違って、IT産業とともに勃興した）に反して、旧リベラル層の人たちは、低所得創造階級の担い手に関連していることが分かった。

#### 4-8. 食嗜好の分析

今回の調査では、新たな質問として、食に関する嗜好（テイスト）と潜在クラスの関係性を分析した。しかし回帰分析をしてみると、「何を食べているか」と「どんな政治的意識を持っているか」との間には、とくに明確な関係を見つけないことができなかった。

そこでさしあたり、食嗜好と政治志向性の関係について、クロス集計表分析（クロス集計表の残差検定）をしたところ、次のような結果を得た。

「新しいリベラル層」の人たちは、食の嗜好（テイスト）について、とくに好き嫌いが少ないようである。雑種的であるといえる。しかし「コンビニ弁当」はあまり食べないこと

が分かった。

「ライト保守層」の人たちは、「輸入食品の小売りチェーン店「カルディ (KALDI)」や「ジュピター(Jupiter)」で売っている食品」が好きで、「自宅で食べる手作りの料理」が好きであり、しかし「ベジタリアン (菜食主義者) やビーガン (絶対菜食主義者) のための食事」は嫌いであることが分かった。また実際、ライト保守層の人たちは、自宅では手作りの料理をよく食べ、反対に、ベジタリアン食やビーガン食は食べていないことが分かった。

「コア保守層」の人たちは、オーガニック食品が嫌いであり、実際に食べていないことが分かった。また、「輸入食品の小売りチェーン店「カルディ (KALDI)」や「ジュピター(Jupiter)」で売っている食品」や「スターバックスなどの大手コーヒーチェーン店のコーヒー」も好みではないことが分かった。

「判断保留層」の人たちは、「カップ麺などのインスタント食品」や「輸入食品の小売りチェーン店「カルディ (KALDI)」や「ジュピター(Jupiter)」で売っている食品」や「自宅で食べる手作りの料理」が好みではないことが分かった。また実際に、自宅ではあまり手作りの料理を食べていないことも分かった。

「黙従傾向層」は、さまざまな嗜好を示したが、この結果はたんに選択肢の右端を選択する傾向があるためかもしれないので、ここでは分析対象としない。

以上の分析結果のなかで注目したいのは、「輸入食品の小売りチェーン店「カルディ (KALDI)」や「ジュピター(Jupiter)」で売っている食品」が好きなのは、「ライト保守層」の人たちであり、「新しいリベラル層」の人たちではない、という点である。カルディやジュピターは、最近になって流行しはじめた新しい食文化を提案するお店である。諸外国のすぐれた食品を並べて、多様な食文化の享受を提案するお店である。こうした食のスタイルを取り入れている人たちは、自らを保守と自認する一方で実質的には新しいリベラルの考え方をもっている「ライト保守層」の人たちによって支持されていることが分かった。

以上は 2019 年調査の回答者を 5 つのクラスに分けた場合の結果である。本報告書は、ここまでが主たる分析である。次の補説では、同じ回答者の回答を、4 つのクラスに分けた場合の分析結果を報告するが、この分析は 5 クラスモデルの分析と比較した場合、含意においてあまり有意義ではない、と私たちは考えている。

## 5. 補説（4クラスモデルの分析）

### 5-1. 4クラスモデルにおける各層の諸特徴

潜在クラス分析を用いて、人々の社会意識（イデオロギー）を四つのクラスに分けてみよう。それぞれのクラスに分類される人たちの特徴は、どのようなものだろうか。表10をご覧ください。総合的に捉えてみると、四つのクラスはそれぞれ、「新しいリベラル層」（31%）、「保守志向層」（27%）、「判断保留層」（31%）、「黙従傾向層」（12%）と名づけることができる。

表10 4クラスモデルに基づく社会意識のクラス分け

	新しいリベラル層	保守層	判断保留層	黙従傾向層	全体割合
クラス構成割合	31%	27%	31%	12%	-----
【条件付き反応確率】					
<b>【投資性】孫への資産の残し方</b>					
教育費として使う	59%	47%	42%	45%	49%
土地や金融資産として残す	41%	53%	58%	55%	51%
<b>【投資性】支出の使い方</b>					
自分や家族の習い事	66%	63%	54%	67%	62%
娯楽	34%	37%	46%	33%	38%
<b>【普遍主義】外国団体客への対応</b>					
外国人団体客の受け入れをいったん見合わせる	11%	26%	31%	52%	26%
マナーを学んでもらって外国人団体客の受け入れを継続する	89%	74%	69%	48%	74%
<b>【普遍主義】アルバイトの採用</b>					
日本人を優先する	2%	28%	39%	67%	28%
日本人と外国人の区別をしない	98%	72%	61%	33%	72%
<b>【少子化】少子化への対応方法</b>					
自分の経験と能力を生かして貢献できることをしたい	66%	54%	62%	74%	63%
政府の対応に任せたい	34%	46%	38%	26%	37%
<b>【少子化】若者たちの出会い支援</b>					
政府は、若者たちの出会いやコミュニケーションを支援すべき	23%	31%	28%	37%	28%
出会いやコミュニケーションは、本人たちに任せるべき	77%	69%	72%	63%	72%
<b>【旧リベラル】日本は絶対平和主義を貫くべき</b>					
そう思う	20%	9%	3%	56%	16%
どちらともいえない	38%	13%	94%	32%	48%
そう思わない	41%	78%	3%	13%	36%
<b>【旧リベラル】従軍慰安婦問題は必要以上の謝罪は不要</b>					
そう思う	58%	81%	15%	68%	52%
どちらともいえない	25%	1%	81%	31%	37%
そう思わない	16%	18%	5%	0%	11%
<b>【旧リベラル】日米安全保障条約は破棄すべき</b>					
そう思う	15%	10%	1%	52%	14%
どちらともいえない	49%	20%	94%	24%	52%
そう思わない	36%	70%	5%	24%	34%
<b>【旧リベラル】象徴天皇制は廃止すべき</b>					
そう思う	15%	3%	1%	43%	11%
どちらともいえない	32%	0%	91%	32%	42%
そう思わない	53%	96%	8%	25%	47%
<b>政治志向性</b>					
コアリベラル (0-2)	9%	4%	1%	1%	4%
リベラル (3-4)	31%	6%	5%	12%	14%
中立 (5)	22%	17%	38%	22%	26%
保守 (6-7)	16%	28%	19%	33%	22%
コア保守 (8-10)	0%	33%	3%	19%	12%
わからない	21%	12%	34%	13%	22%

全体割合に比べ、割合の高いものを太字

N = 1200

第一のクラスは、「新しいリベラル層」と呼ぶことができる。「新しいリベラル層」の人たちは、人的資本に投資したいと思う傾向があり、また、他者を差別しないで普遍主義的な態度を重んじる傾向がある。少子化対策においては、「自分の経験と能力を生かして貢献」したいけれども、政府が人々の出会いを支援することには反対で、出会いは基本的に本人たちに任せるべきだと考える。天皇制や平和主義や憲法改正の問題については、次のような結果になった。「絶対平和を貫くべき」と答える人は20%であり、これは他のクラスと比べて多いが、しかし同じ問題に対して「そうは思わない」と答える人は41%である。全体的にみると、絶対平和主義者ではない人が多い。「従軍慰安婦に対する謝罪」については、これを必要と考える人が16%、不要と考える人が58%で、全体的にみると不要と考える人が多い。「日米安全保障を破棄すべきである」と思う人は15%であり、これに対してそのように思わない人は36%である。全体的にみると、破棄すべきではないと考える人の人が多い。象徴天皇制を破棄すべきであると思う人は15%であり、破棄すべきではないと思う人は53%である。全体的にみると象徴天皇制を維持すべきであると考えてる人の人が多い。以上をまとめると、新しいリベラル層の人たちは、いわゆる旧リベラルの政治的志向性をあまり持っていないといえる。

新しいリベラル層の人たちは、自己認識としては「リベラル」あるいは「コア・リベラル（一〇段階の回答で0～2の回答に当てはまる人）」である割合が高い。

（今回の潜在クラス分析（4クラスモデル）で抽出された「新しいリベラル層」は、2018年の調査における「新しいリベラル層」と、基本的に似た特徴を示している。）

第二のクラスは、「保守志向層」と呼ぶことができる。その特徴は、自らの蓄えを「土地や株などの資産として残す」傾向と、「人的資本に投資する」傾向の二つをあわせもち、また、どちらかと言えば「やや普遍主義的」な態度をとる。少子化対策については、自分が貢献するよりも「政府におまかせする」という態度をとり、政府は「人々の出会いを支援すべき」であると考えてる傾向にある。このクラスに分類される人たちは、天皇制や平和主義や憲法改正などの問題に対して、保守的な回答を示している。すなわち、天皇制を支持し、憲法九条の改正を支持している。またこのクラスの人たちは、イデオロギーの自己認識においても「保守」であり、「コア保守」の割合も高い。こうした自己認識の観点から、これらの人々を「保守志向層」と呼ぶことができる。

第三のクラスに属する人たちは、「判断保留層」と呼ぶことができる。その特徴は、さまざまな点で判断を保留する（回答の選択肢のなかで真ん中を選択する）点にある。「リベラル-保守」の自己認識においては、この二つのイデオロギーに対して中立的か、あるいは「わからない」と答える人が多い。この「判断保留層」は、しかし、二択の質問については、いずれかを選択して態度を表さなければならない。このクラスに属する人たちは、自らの蓄えを人的資本に投資しない傾向や、普遍主義的ではない態度をとる傾向にあることが分かった。また、少子化対策については、先の「新しいリベラル層」と同様に、「自分の経験と能力を生かして貢献」したいけれども、政府が人々の出会いを支援することには反対で、出会いは基本的に本人たちに任せるべきだと考える傾向にあることが分かった。

最後に、「黙然傾向層」と呼びうる人たちがいる。各質問に対する回答の選択肢のなかで、右端の「そう思う」ばかりを選択するような人たちである。このクラスに属する人たちの回答を除外して、同様の潜在クラス分析を行ってみたところ、「新リベラル層」、「保守層」、

「判断保留層」の三つが、やはり同じように抽出された。そこで以下では、この「黙従傾向層」を一つのクラスとして把握し、回答結果を四つのクラスに分けて、それぞれの人物特徴を調べることにした。

このクラスに属する人たちは、どんな問題に対しても「そう思う」と答えるので、あらゆる点で黙従する傾向があるように見える。しかし黙従傾向層の人も、二択の問題については、いずれかを選択して回答しなければならない。この「判断黙従層」に属する人たちは、保守志向層と同様に、自らの蓄えを「土地や株などの資産として残す」傾向と、「人的資本に投資する」傾向の二つをあわせもつことが分かった。その一方で、判断黙従層の人たちは、普遍主義的ではない（差別主義的な）態度をとる傾向にある。少子化対策については、新しいリベラル層と同様に、「自分の経験と能力を生かして貢献」したいけれども、政府が人々の出会いを支援することには反対で、出会いは基本的に本人たちに任せるべきだと考える傾向にある。「リベラル-保守」の自己認識に関する質問には、「コア保守」や「保守」を自認する人たちの割合が高かった。ただしこれは、回答者が適当に、回答の一番右側の選択肢を選んだ結果であるかもしれない。この「黙従傾向層」は、自分の判断を留保するのではなく、アンケートに回答することがそもそも面倒であると感じて、一番右側の選択肢を選んだのかもしれない。他の二択の質問への回答を考慮すると、このクラスの人たちは、必ずしも保守的な態度を持っているわけではないかもしれない。

なお、2018年の調査において、私たちは潜在クラス分析を用いて「新リベラル層」と「旧リベラル層」をそれぞれ析出した。しかし今回の2019年の調査では、私たちは質問の仕方を工夫して、なんでも「そう思う」と回答する人たちを排除するように試みた。おそらく今回の分析で析出された「黙従傾向層」は、2018年度の分析で「旧リベラル」に分類されたタイプの人たちであるだろう。このクラスに属する人たちは、イデオロギー意識において一貫しているわけではなく、どんな問題に対しても「そう思う」と答えるような、黙従傾向にある人たちであることが分かった。

以上が四つのクラスに分けた場合のそれぞれのクラスの特徴である。

#### 5-2. 4クラスモデルにおける各層の社会的背景の分析

これらの四つのクラスは、それぞれどのような属性の人たち、あるいはどのような社会的背景をもった人たちが担っているのか。多項ロジット潜在クラス回帰分析によって、それぞれの社会的背景や属性を調べてみると、次のような結果になった（表11参照）。

「新しいリベラル層」は、女性や高学歴層（大卒・院卒）が担い手になる傾向がある。その一方で、低所得（世帯収入400万以下）であり、主観的には、自分の所属する社会的階層が、自身の親よりも下降移動したと感じているものも「新しいリベラル層」になる傾向がある。このような特徴は、2018年の調査における「新しいリベラル」と一致している。

次に「保守志向層」は、男性や、中程度の所得（世帯収入400-800万）をもつものが担い手になりやすい。学歴や主観的な階層移動については、とくに特徴がみられなかった。

第三に、「判断保留層」は、40代の人々や、世帯収入が「不明（DKNA）」と答える人たちが担い手になる傾向がある。（この傾向は、おそらくこの「判断保留層」の人たちが、質問に答えたくない傾向をもつからだと推測できる。）また主観的には、自身の親が所属する階層と今の自分の階層が変化していないと答えるものがこの層になりやすい。

最後に、「黙従傾向層」は、男性が多く、高学歴ではない。その一方で、高所得（世帯収入 800 万以上）を得ており、政令指定都市に住んでいる、という特徴がある。

表 1 1 多項ロジット潜在クラス回帰分析による各クラスの担い手の説明（4 クラスモデル）

	新リベラル層		保守層		判断保留層		黙従傾向層	
	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.
<b>男性ダミー</b>	-0.834 ***	0.175	0.592 ***	0.163	-0.145	0.138	0.387 †	0.218
<b>年代</b>								
20代	0.166	0.172	-0.072	0.149	-0.360 *	0.143	0.266	0.193
30代	-0.310 †	0.178	0.008	0.137	0.156	0.117	0.146	0.180
40代	0.104	0.147	-0.096	0.129	0.214 †	0.110	-0.222	0.181
50代	-0.059	0.176	-0.025	0.142	0.052	0.125	0.032	0.189
60代	0.099	0.159	0.185	0.130	-0.062	0.125	-0.222	0.205
<b>学歴</b>								
中学・高校	-0.139	0.144	-0.157	0.120	0.050	0.097	0.246	0.154
高専・専門・短大	-0.120	0.145	0.123	0.123	0.003	0.102	-0.006	0.160
大学・大学院	0.259 *	0.118	0.034	0.099	-0.053	0.085	-0.240 †	0.133
<b>職業</b>								
専門・管理	-0.151	0.193	0.060	0.140	0.116	0.134	-0.025	0.194
事務・販売	0.203	0.170	-0.258 †	0.148	0.186	0.115	-0.130	0.180
ブルーカラー	-0.359	0.337	0.132	0.216	0.068	0.184	0.159	0.263
自営業	0.223	0.222	-0.038	0.175	-0.280 †	0.157	0.095	0.225
無職・学生	0.084	0.186	0.104	0.140	-0.089	0.123	-0.099	0.211
<b>非正規雇用ダミー</b>	0.204	0.237	-0.425 †	0.235	-0.120	0.177	0.340	0.279
<b>世帯収入</b>								
400万円未満	0.277 *	0.138	-0.062	0.129	0.007	0.107	-0.222	0.187
400-800万円未満	-0.229 †	0.134	0.232 *	0.112	-0.198 *	0.100	0.195	0.163
800万円以上	-0.205	0.165	0.070	0.128	-0.333 **	0.118	0.467 **	0.177
わからない	0.156	0.185	-0.240	0.171	0.524 ***	0.130	-0.440	0.298
<b>政令指定都市居住</b>	-0.368 *	0.173	0.053	0.143	-0.063	0.124	0.379 *	0.192
<b>主観的社会移動</b>								
上昇移動	-0.125	0.136	0.103	0.103	0.010	0.098	0.012	0.153
非移動	-0.232 *	0.116	-0.090	0.093	0.241 **	0.081	0.081	0.128
下降移動	0.357 **	0.116	-0.012	0.105	-0.251 *	0.100	-0.093	0.158
N	1177							
R <sup>2</sup>	0.085							

†: p < .10, \*: p < .05, \*\*: p < .01, \*\*\*: p < .001

### 5-3. 4クラスモデルにおける政治志向性と政治的態度

次に、4クラスに分けたときのそれぞれのクラスの人たちが、どんな政党を支持しているのかについて調べてみた（表 1 2 参照）。

すると、「新しいリベラル層」の人たちは、立憲民主党の支持者が多いものの、支持政党なしと答える人が、6割もいることが分かった。「新しいリベラル層」の人たちの政治的意識を代弁する主要な政党は、存在しないとみることができる。

これに対して「保守志向層」の人たちは、自民党や維新の会を支持する人が多い。支持政党なしは3割であった。この層に属する人たちは、自らの意識を政治的に代表する政党があるといえる。

「判断保留層」の人たちは、支持政党なしが7割であった。「黙従傾向層」の人たちは、

自民党や維新の会を支持する人が多いものの、支持政党なしは 5 割であった。  
 なお、イデオロギーの観点から分類した「旧リベラル層」の人たちは、共産党やれいわ新  
 選組の支持者が多い一方で、支持政党なしは 6 割であった。

表 1 2 各クラスの支持政党（4クラスモデル）

	新リベラル層	保守志向層	判断保留層	黙従傾向層
自民党	13.1%	41.7%	14.7%	25.2%
公明党	0.3%	1.5%	2.6%	2.4%
共産党	2.7%	1.2%	2.6%	2.4%
日本維新の会	4.6%	6.4%	3.7%	7.1%
国民民主党	1.1%	0.3%	0.3%	1.6%
立憲民主党	10.1%	3.7%	3.7%	5.5%
社会民主党	1.4%	0.6%	0.3%	1.6%
れいわ新選組	4.9%	1.5%	1.3%	2.4%
NHKから国民を守る党	0.5%	2.8%	0.8%	3.1%
支持政党はない	60.8%	39.3%	70.0%	48.8%

#### 5-4. 新しいリベラルを析出するための他の質問群に対する回答傾向

前回の調査と同様に、私たちは新しいリベラルを析出するための他の質問群を用意した。  
 すると「新しいリベラル層」と（イデオロギーの観点から分類される）「旧リベラル層」  
 の人々は、これらの質問に対して、いずれもほぼ同じように回答傾向にあることが分かっ  
 た（表 1 3 参照）。

興味深い発見は、このことに加えて、「新しいリベラル層」と「保守傾向層」の回答傾向  
 も似ている、という点である。もっとも、新しいリベラル層の人たちのほうが、普遍主義  
 的であり（例えば外国人の上司でも OK と考える傾向がある）、また女性教師の割合を増や  
 すことに賛成する傾向にある。加えて「新しいリベラル層」の人たちは、孫世代の活躍に  
 はあまり関心がない、これに対して保守志向層は関心がある、という違いがある。

表 1 3 「新しいリベラル」を析出するための質問群に対する回答

	新リベラル層	保守志向層	判断保留層	黙従傾向層
【組織運営にメンバーが不満を持っていないくても、メンバーにはもっと発言権を与えるべき】	<b>55%</b>	<b>53%</b>	21%	50%
【所属している組織での人間関係にしばられないため、複数の組織に所属していきたい】	<b>41%</b>	<b>38%</b>	15%	35%
【多くの組織で、一定の割合でリーダーを女性にするべきだ】	<b>34%</b>	28%	15%	34%
【たとえ日本語に問題がないとしても、外国人が自分の上司になってほしくない】	<u>8%</u>	<b>19%</b>	7%	41%
【自分に任された仕事は、どんなに理不尽な要求であってもやり遂げる方だ】	27%	<b>30%</b>	11%	42%
【家庭環境や暮らす地域により、社会的に有利／不利の差が出てはならない】	<b>59%</b>	<b>53%</b>	22%	53%
【自国や地域や組織のリーダーが、自由と平等を重んじる人なら、自分は何か貢献したい】	<b>53%</b>	<b>47%</b>	15%	47%
【孫の育児・教育にできるだけ参加して、親の子育て負担を軽減してあげたい】	<b>42%</b>	<b>44%</b>	15%	44%
【一家団欒で食事より、「子ども食堂」を通じ多くの隣人との食事機会を大切にしたい】	13%	11%	6%	25%
【政府には、中学校の女性教員の割合を、50%にまで引き上げてほしい】	<b>21%</b>	15%	8%	28%
【どちらかといえば、50年後の孫世代の日本人の活躍には関心がない】	<b>25%</b>	22%	11%	35%
【年金その他の受給資格をめぐる、「高齢者」定義を「70歳以上」に引上げることは賛成】	24%	<b>29%</b>	8%	36%
【50年先の日本社会を考えると、少子化による人口減少が心配だ】	<b>64%</b>	<b>70%</b>	33%	58%
【政府には、少子化対策をするより、少子化を前提のうえで各種政策を立ててほしい】	<b>65%</b>	<b>61%</b>	28%	63%

調整済み残差が+1.96以上は太字、-1.96以下は下線

### 5-5. 人物クラスターとの関係

「新しいリベラル層」は、どのような人たちなのか。具体的な人物像を知るために、私たちは初回の調査から、18の「人物クラスター」を用意して質問してきた。今回の調査で分かったことは、「新しいリベラル層」と「旧リベラル層」は、いずれも同じような人物特徴を持っている、ということである。具体的に、以下の11の人物クラスターと関連が強いことが分かった（クロス集計分析において調整済み残差を検討した結果、この関連は、回帰分析ではなかったような。）

- ・「低所得創造階級」たとえ給料が低くても、文化的に価値ある仕事につきたい。
- ・「会話好き（階層横断性）」サークルやイベントなどで、互いの地位を気にせずに人と会話するのが好きだ。
- ・「文化系サークル出身」中学以降の教育機関で、文化系の部活やサークルで活動していたことがある。
- ・「同質的親密圏志向者」趣味の合う人たちといっしょに時間を過ごすことが好きだ。
- ・「草食系男子」毎朝お弁当を作ってあげてもいいので、妻（あるいは将来の妻）には働いてほしい。
- ・「自然派」ゴージャスな生活よりも、シンプルで自然派の生活が好みだ。
- ・「コト消費志向者」洋服や調度品などの身の回りのモノよりも、グルメや海外旅行にお金を使いたい。
- ・「お笑い風刺者」偉い人たちの権威を笑い飛ばしてくれるようなお笑い系芸人が好きだ。
- ・「ケアに向いている人」私は人にやさしく接することが苦手ではないので、医療・介護関係の仕事にも向いていると思う。
- ・「啓蒙的消費者」広告には踊らされず、じっくり考えてからネット販売で商品を購入する方だ。
- ・「ミニマリスト」モノをできるだけ持たない生活をしたい。

なお、前回の2018年の調査でも、これらの人物クラスターと新しいリベラル層の関連は強いことが示された。この結果によって、「新しいリベラル層」と「旧リベラル層」の人物イメージが特定できた。

次に、「保守志向層」は、以下の人物クラスターと関連が強いことが分かった。

- ・「会話好き（階層横断性）」サークルやイベントなどで、互いの地位を気にせずに人と会話するのが好きだ。
- ・「会話好き（飲み屋）」飲み屋で人と話をするのが好きだ。
- ・「ネット洞穴人間」ネットで「お気に入り登録」をしたり、「お気に入り」のリスト化をしたりするのが好きだ。
- ・「コト消費志向者」洋服や調度品などの身の回りのモノよりも、グルメや海外旅行にお金を使いたい。
- ・「啓蒙的消費者」広告には踊らされず、じっくり考えてからネット販売で商品を購入

する方だ。

以上の人物クラスターは、2018年の調査結果とは大きく異なった。唯一重なる人物クラスターは、「ネットで「お気に入り登録」をしたり、「お気に入り」のリスト化をしたりするのが好きだ」であった。なぜこのような違いが生まれたのかについては不明である。今後、同様の調査を重ねるなかで、答えを見つけたいと思う。

最後に「黙従傾向層」は、以下の人物クラスターと関連が強いことが分かった。

- ・「ネット発信人間」ネットで「情報発信」をしたり「チャット」したりするのが好きだ。
- ・「起業家的文化応援者」まだあまり売れていないアイドルやアーティストの活動を応援するのが好きだ。

このように、黙従傾向にある人が、インターネットの空間では積極的に情報を発信し、また売れていないアイドルを応援するという積極的な態度を示すというのは、興味深い発見である。

#### 5-6. 4クラスモデルの「新しいリベラル層」の特徴：まとめ

以上において、私たちは2019年の調査結果の主な分析を示した。これらの分析結果から、「新しいリベラル層」の特徴をまとめてみよう。

「新しいリベラル層」は、1200名の回答者のなかの約3割の人たちであり、決して少数派ではなく、大きな層をなす存在であるといえる。「新しいリベラル層」の人たちの回答は、概ね、私たちが理論的に想定したものであった。第一に、「人的資本への投資」を重視し、他者を差別しない「普遍主義」の態度をもっている。少子化対策については、自分の経験と能力を活かして貢献したいけれども、他方で、「出会い」については、政府はとくに支援すべきではなく、本人たちに任せるべきであると考えている。また「新しいリベラル層」は、日本の将来を憂い、孫世代に対する社会的投資に対して関心を示しているものの、孫世代たちの活躍については、あまり関心がないようである。

今回の調査結果で、「新しいリベラル層」の人たちは、「旧リベラル層」の人たちと、あまり特徴が異なることも分かった。当初、私たちは、この二つのクラスの特徴に、大きな違いがあるのではないかと推測した。しかし4クラス解の分析では、大きな相違はなかった。とくに、新しいリベラル質問群（問18）や、移民に対する態度、人物クラスターの特徴は、非常に近いといえる。人物の特徴という点で、「新しいリベラル層」と「旧リベラル層」を区別することは難しいことが分かった。ただし、「旧リベラル層」は、かならずしも低所得と関連するわけではなく、また、階層の主観的な下降移動と関連するわけでもない、という違いがある。これは言い換えれば、「新しいリベラル層」の担い手は、高学歴でありながら、生活が苦しい人たちである、ということである。

#### 5-7. 4クラスモデルにおける食嗜好の分析

今回の調査では、新たに食に関する嗜好（テイスト）の質問を用意し、食嗜好と政治志向性の関係を分析した。しかし回帰分析をしてみると、「何を食べているか」と「どんな政治的意識をもっているか」とのあいだには、特に明確な関係を見つけることができなかった。そこでさしあたり、食嗜好と政治志向性の関係について、クロス集計表分析（クロス集計表の残差検定）をしたところ、次のような結果を得た。

（注：例えば、保守志向層の人は、男性が多いのであるが、このクラスに属する人たちのオーガニック嫌いが、たんに男性のオーガニック嫌いを反映しているにすぎないのかどうか。こうした他の属性に還元できない政治志向性が、潜在クラス分析で析出されたクラスに由来するのかどうかについて、重回帰分析で検討することができる。これは今後の課題としなければならない。）

「保守志向層」は、意識高い系の食品（オーガニック、ベジタリアン食）があまり好みではなく、実際、あまり食べていない。これに対して「新しいリベラル層」は、意識高い系食品（オーガニック、ベジタリアン食、「カルディ」や「ジュピター」で売っている輸入食品系）が好きである。ただし、「新しいリベラル層」は、意識高い系の食品を実際に食べているのかというと、関連はみられなかった。他方で、「新しいリベラル層」の人たちは、コンビニ弁当は好きでもないし、食べもしない傾向にあることが分かった。（以下を参照）

##### □好みについての分析

「オーガニック（自然）食品」：新しいリベラル層は有意に「好き」の割合が高く、保守層は有意に「好き」の割合が低い。

「ベジタリアンやビーガンのための食事」：保守層は有意に「好き」の割合が低い。

「カップ麺などのインスタント食品」：保守層は有意に「好き」の割合が高い。

「コンビニ弁当」：新しいリベラル層は有意に「好き」の割合が低い。

「「カルディ」や「ジュピター」で売っている食品」：新しいリベラル層は有意に「好き」の割合が高い。

##### □摂食頻度の分析（よく食べる＋しばしば食べるの割合）

「オーガニック（自然）食品」：保守層は有意に「食べる」の割合が低い。

「ベジタリアンやビーガンのための食事」：保守層は有意に「食べる」の割合が低い。

「コンビニ弁当」：新しいリベラル層は有意に「食べる」の割合が低い。

「「カルディ」や「ジュピター」で売っている食品」：保守層は有意に「食べる」の割合が低い。

以上、本節は補説として、4クラスモデルの分析結果を検討してきた。繰り返すと、本報告書の分析は、その社会的含意の観点から、5クラスモデルを採用し、本文ではその分析を行った。4クラスモデルはそれよりも含意が劣るため、補説というかたちでその分析結果を示した。